



# 第三世界の民主化

はじめに

労働者人民諸君！

① 戦争と革命、プロレタリア階級独裁・共産主義革命の時代が到来している。武装して闘う非法のマルクス・レーニン主義党を創建しなければならない。全ゆる方法で、我々と連絡を取ってほしい。

② 米帝国主義の霸權・世界支配体制は崩壊しつつある。

これを実現した主力軍は、インドシナで勝利し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなど第三世界の全域に拡大している民族解放革命戦争である。中国、ベトナム民主共和国、朝鮮民主主義人民共和国などの社会主義国は、第三世界の民族解放斗争を確固として支援している。第三世界人民の革命は、パレスチナと南朝鮮とポルトガル、スペインの三つを急速に次の最前線としつつある。

米帝・西欧帝・日帝は、相互に矛盾を深めつつも、全体としては、依然として、米帝を盟主として植民地支配体制を維持、再編すべく、第三世界との対決を強めていいる。そして、ソ連社帝を第三世界と社会主義国に対する侵略の策動員しようとしている。このような中で、第二世界の日本と西欧では、恐慌が進行し、米帝に矛盾を転嫁され、南朝鮮とポルトガル・スペインの革命に足下を搔かれて、米ソの霸權争奪の主戦場になっていることによつて、帝国主義の体制的危機が深化している。ブルジョア階級とプロレタリア階級の階級対立が激化し、革命情勢、ファンズムと共に産主義革命の時代が端緒的に始まりつつある。

ソ連は、現代修正主義によってブルジョア階級独裁と資本主義に変質し、帝国主義に転化した。このソ連社会帝国主義は、第三世界の民族解放斗争や第二世界のブルタリア階級の階級斗争を利用し、変質させ、支配下に組み込みつつ米帝の霸權を突き崩し、自己の世界支配体制を築こうとしている。この米ソの第三次世界再分割戦の主戦場は歐州であり、米帝が守勢でソ連社帝が攻勢に出ている。第三次世界大戦の危険性が増大している。

中国は、プロレタリア階級独裁の下での継続革命によって社会主義を打ち固め米帝とソ連社帝の霸權主義に反対し、第三次世界をはじめ世界各国の人民の革命を支援し世界革命根據地となつてゐる。世界各国の人民は、社会主义国を根拠地とし、アジア・アフリカ・ラテンアメリカなどの第三世界で民族民主革命を拡大し、日本、西欧などの第二世界で、プロレタリア階級独裁・共産主義革命を切り開き、霸權主義に反対し、米ソ二大帝国主義を包囲しなければならないし、するであろう。

(3) インドシナ人民の勝利の後、アジアの社会主義国を根拠地とする民族解放革命戦争は、南朝鮮を次の最前線としている。朝鮮民主主義人民共和国は、自主的平和的統一闘争を強め、南朝鮮の反米・反日・朴打倒の民族民主革命は爆発前夜である。米帝と日帝は、朝鮮革命を庄稼化し、朝鮮の南北分断を維持するために、日米安保体制を再編、強化している。その下で朴政権を手先とした朝鮮侵略反革命を強め、南で軍事独裁支配を強化し、北へ戦争を発動しようとしている。これを主導しているのは南朝鮮を唯一、最大の植民地としている日帝である。

日本資本主義は、高度成長が破綻し、米帝に矛盾を転嫁され、深刻な恐慌に突入している。国家独占資本主義の強化とその下での搾取（賃金統制）、収奪（インフレ）抑圧（産業と行政の合理化）が強化されている。日米安保体制の下での日帝のブルジョア階級と人民の闘争の高揚の中で破綻し、天皇制・ファシズム的統治形態に反動化しつつある。官僚的、警察的、軍事的独裁と天皇制が結合し、権威主義、排外主義、差別主義の攻撃が強まっている。

人民の闘争は、朝鮮侵略反革命に反対し戦争に反対する闘争、反動に對し、ブルジョア階級独裁の天皇制・ファシズム的統治形態に反対する闘争、国家独占資本主義の下での搾取・収奪・抑圧に反対する三大水路として発展し、爆発しつつある。高度成長の中で増大したプロレタリア階級は、國家独占資本の下で組織労働者が民間・社会「共」の統制を突破してこの闘争を主導し、民間の中小零細資本の下の労働者、社外工、臨時工などの未組織労働者の広範な層がこの闘争を拡大しつつある。民間の独占資本の下の組織労働者も同盟、IMF・JCI、民社などの帝国主義的労働運動への反抗を始めている。農民は農業危機の中で、中農・小ブルジョアの没落の貧農・半プロレタリアの拡大が進み、都市ブルジョア階級の没落、ブルジョア化も進んでいる。多くがブルジョア階級の下層を構成している部族、衆族、被抑圧や婦人などの独自の解放運動も発展している。青年と学生は、依然、人民の闘争の中で大きな役割を果している。

ソ連社帝が政治的脅迫と経済的誘惑とによって日帝を米帝から引き離し、自己の勢力圏に組み込もうとしている。「共产党」や社会主義協会、カクマルなどの修正主義集団は、ソ連社帝と結び付くとともに、プロレタリア階級を小ブルジョア階級に追隨させ、結局、日帝の天皇制・ファンズム的統治形態と朝鮮侵略反革命に屈服させる社会帝国主義の役割を果している。

日本帝国主義の体制的危機が深化し、朝鮮革命と日本

革命が連動する時代が始まり、革命情勢、プロ独一共産主義革命の時代が端緒的に始まっているのである。日本人民は、朝鮮革命と連帯し、日帝の朝鮮侵略反革命、戦争を日本革命に転化しなければならないし、するだろう。プロレタリア階級は、貧農一半プロレタリアと同盟し、中農一小ブルジョアと都市小ブルジョア階級を引きつけて、安保粉碎、日帝打倒、米帝追放のプロ独一共産主義革命に突き進まなければならぬ。

④このよう情勢からして、我々の任務は以下である。

第一に、朝鮮侵略反革命に反対し朝鮮革命を支持することと、天皇制フアンズム的統治形態のブルジョア階級独裁を打倒し、プロレタリア階級独裁を樹立すること。国家占有資本主義から社会主義に前進すること。この三つを要とする暴露と宣伝・煽動を遂行しなければならない。第二に官僚的、警察的、軍事的独裁の武装力をせん滅する武装闘争、プロレタリア階級独裁のための武装闘争をゲリラ戦として闘わなければならない。第三に修正主義、社会帝国主義集団に勝利し、プロレタリア階級のマルクス・レーニン主義党、武装して闘う非合法党を建設することである。我々は、革命的宣伝・煽動・革命的闘争・革命的組織というこの三大任務を立派にやり遂げるつもりである。だから我々の総路線は、次の六つのスローガンで表現される。

(1) 経済主義、テロリズムの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線を獲得しよう！  
これは、結局組織問題に帰着する。武装して闘う非合法党を建設することである。職業革命家の組織を中心とし、中央集権制に基づいて非合法党を建設し、非合法党の基本組織そのものを同時に軍事組織として、中央から建設する路線である。そして「経営工場細胞を基礎として、民主主義的中央集権制に基づいて党を建設し、党の基本組織を軍事組織を付け加える」路線に反対しなければならない。これは実際には、労働者の組織を基礎とし、地方分権制に基づく合法党であり、合法党の基本組織に付け加えて、非合法軍事組織を建設維持することはできないので軍事組織の放棄である。経済主義の合法主義である。

(2) 反スタ・マルクス主義を揚棄し、反帝・反社帝ーマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の路線を獲得しよう！  
これは、結局、毛沢東思想を承認することである。その眼目は、社会主義においてプロレタリア階級独裁（社会革命）を放棄することに反対し、共産主義の高い段階を実現するまでは、社会主義（共産主義の低い段階）においても、プロレタリア階級独裁を堅持することである。我々は、この路線を連合赤軍問題の総括と塙見一派（プロ革）との党派闘争を通して獲得した。プロレタリア階級のマルクス・レーニン主義党、武装して闘う非合法派系、グンド系の諸派に対する論戦と統合を推し進めていくつもりである。塙見一派は、急進民主主義、経済主義、合法主義であり、依然として、トロツキズムと毛沢

東思想の折衷である。特に急進民主主義・経済主義・合法主義か、それとも、武装して闘う非合法のマルクス・レーニン主義党か、という党建設の二つの道をめぐる闘争は、塙見一派と我々との対立の核心・眼目である。

(3) 日米安保体制を粉碎し、日本帝国主義を打倒し、米帝国主義を追放し、プロレタリア階級独裁を樹立し、社会主義を建設し、共産主義を実現しよう！ 天皇制を打倒せよ！

(4) 「共産党」官本一派、社会主義協会、カクマル等の修正主義、社会帝国主義集団を打倒し、日本プロレタリア階級のマルクス・レーニン主義党を創建しよう！ 武装して闘う非合法党を建設せよ！

(5) プロレタリア階級の指導の下、社会主義統一戦線を結成し、赤軍を建設し、革命政府を樹立しよう！ 以上は、日本革命の政治路線である。

(6) 米ソ二大超帝国主義の霸權主義に反対し、社会主義国と共に、第三世界の民族解放闘争を支援しよう！ 米帝、日帝の朴政権を手先とした朝鮮侵略・反革命に反対し、朝鮮人民の自主的平和的統一闘争、南朝鮮人民の反米・反日・朴打倒の民族・民主革命、在日朝鮮人民の民主的民族的権利のための闘争を支持せよ！ 米ソ二大帝国主義のアラブ・パレスチナの侵略・分割戦に反対し、イスラエル・シオニスト、アラブ反動派と闘うアラブ・パレスチナ人民を支援せよ！

これは国際路線である。

⑤党を非合法軍事組織として建設すること、武装して闘う非合法党といふ全く新しい型の党を建設すること、これは具体的にはどんなことなのか。組織問題は、その性格上、秘密を要する。具体的に説明することはできない。我々は、以下で武装して闘う非合法の基本性格を述べることにする。

## 法

### 第一章 マルクス・エングルスの党組織観

(1) 「共産党宣言」について  
「共産党宣言」は、「ドイツ・イデオロギー」で確立した唯物史観に立脚した革命論であり、1848年初頭の資本主義社会を、唯物史観を導びきの糸として具体的に分析し、来るべき未来を展望した「予言の書」（山之内）である。マルクスとエンゲルス及党組織観を最初に具体的に体系的に提起したのが「共産党宣言」である。

(a) 「共産党宣言」と資本主義批判  
マルクスとエンゲルスは、「共産主義者の理論的諸命題は、決してあれやこれやの社会的改良家たちが発見した理念や、原理にもとづくものではない」と断言し、「共産主義者の理論的諸命題は、現にある階級斗争の実態、すなわち、われわれの目の前でおこっている歴史的運動の一般的表現に他ならない」と宣言した。第一節こそその証明であり、資本主義批判である。「ブルジョア的生産業並びに交通諸関係、ブルジョア的所有諸關係

なくも巨大な生産手段や交通手段を廢法で呼びだした近代的ブルジョア社会は、自分が呼びだした地下の悪魔をもはや制禦できなくなつた」（同）「……こと数年来、工業及び商業の歴史は、まさしく近代的生産諸関係に対するブルジョア階級とその支配の生存条件である所有諸関係に対する近代的生産諸力の反逆の歴史である」（同）「この恐慌に於ては、以前のどんな時代の下でも起りうるとは考えられない様な、社会的疫病、過剰生産といふ疫病及発生する」（同）「社会が自由にすることのできる生産諸力は、もはやブルジョア的文明およびブルジョア的所有関係の促進には役立ないので、反対に生産諸力は、この關係にとつて余りに強大になつてしまふ。この關係によつて阻止されるのだ。そして生産諸力は、この障害を征服するや否や、全ブルジョア社会を混乱におとし入れ、ブルジョア的所有の存在をおびやかす」（同）。かかる生産（諸）力と生産（諸）關係の矛盾は、ブルタリアートが「ブルジョア階級を暴力的に崩壊させ、それによつてブルレタリア階級がその支配を打ち立てる」（同）ことによつて初めて解決するのである。

#### (b) 「共産党宣言」と革命党

マルクスとエンゲルスは、第一節の資本主義批判を受けて革命党について次の様に規定している。「共産主義者、ブルレタリア一般に對してどの様な關係に立つてゐるのか？共産主義者は、他の労働者党に比べて特殊な党ではない。かれらは、全ブルレタリア階級の利益から離れた利益を持つてゐない。かれらは、ブルレタリア運動をその型にはめない。すなわち、一方では、共産主義者は、ブルレタリアの種々の国民的斗争に於いて、国籍とは無關係な、共通の全ブルレタリア階級の利益を強調し、それを貫徹する。他方では、共産主義者はブルレタリア階級とブルジョア階級の間の斗争が経過する種々の發展段階に於て、常に運動の利益を代表する。したがつて、共産主義者は、実践的には、すべての国々の労働者党の最も断固とした、常に推進的な部分であり、理論的には、ブルレタリア階級の形成、ブルジョア支配の打倒、ブルレタリア階級による政治権力の獲得である」（同）。しかし、当時のマルクスとエンゲルスは「労働者革命の第一歩は、ブルレタリア階級を支配階級に高めること。民主主義を斗いとること」の組織的プログラムの具体的提起を欠落させていた。ブルレタリアートの独自な組織政策は、対象外にあつた。

#### (c) 革命党—共産主義者とブルジョア政党

マルクスとエンゲルスは、空想的社會主義を「ブルレタリア階級の側に、歴史的独立性を独自の政治運動を全く認めない」と批判し、繰り返し、共産主義の独立性を主張する。他方、マルクスとエンゲルスは、「共産主義者の関心は、むしろブルジョアをへぐだけ早く、は倒すために、ブルジョアジーができるだけ早く政権を握ることを援助することである」「反動体制が打倒される迄では、共産主義者も民主主義者として行動する」と言った方針を採用している。つまり「共産主義者は、労働

者階級の直接當面する目的や利益を達成するために斗争だが、共産主義者は、現在の運動の中にあつて、同時に運動の未来を代表する」という訳である。とのテーゼは、「階級斗争が遂に決着に近づく時期になると……以前に貴族の一部が、ブルジョア階級に移行した様に今や、ブルジョア階級の一部が、特に全歴史運動の理論的理解に力をつくしたブルジョア思想家の一部が、ブルレタリア階級に移行する」と言う、「階級移行論」に支えられていた。結局、マルクスとエンゲルスは、ブルジョア政党に明確に組織的分界線を引かなかったのであり、との組織的曖昧さの結果、ドイツの革命の「全体としての運動では、完全に小ブルジョア民主主義者の支配と指導」の下に陥つたのである。

#### (d) 世界革命

エンゲルスは、「原理」の中で、世界革命を次の様に規定している。「問、この革命は、ただ一国だけに、單独に起つて得るだろうか。答へ、いや起つて得ない。大工業は世界市場をつくりだし、すでに地球上のすべての人民、とりわけ文明國の人民をたがいに結びつけてゐるので、どこの国の人民、よその国に起つたことに依存している。さらに大工業は、ブルジョアジーとブルレタリアートとを、すでに社会の二つの決定的な階級にし、又この階級のあいだの斗争を現在の主な斗争にした。この点で大工業は、文明諸國に於ける社会の發展を、すでに均等にしてしまつてゐる。だから共産主義者は、決してただ一国だけのものではなく、すべての文明國で、いいかえると、すくなくとも、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツで同時に起つてゐる革命となるであろう。この革命は、これらの國々で、どの国が他よりも發達した工業、最も困難であり、イギリスでは最も急激で容易であろう。それは、世界の他の國々にも同じ様に、いちじるしい反作用をおよぼし、それらの國々のこれまでの發展様式を全く一変させ、非常に促進させるだろう。それは、二つの世界革命であり、したがつて世界的な地盤で起つてゐる。エンゲルスは、世界市場と大工業を説明概念として、共産主義の世界革命を論証し、その際、イギリスが、世界革命の引き金であると結論づけてゐる。つまり、イギリス革命の烽火が大陸へ飛び火し、フランス、ドイツ革命を惹起するとしている。他方、「共産党宣言」の末尾は、この世界革命論とは、全く逆のこととを主張してゐる。「共産主義者は、その主要な注意をドイツに向けてゐる。それはドイツがブルジョア革命の前夜であり、まだドイツは、17世紀のイギリスや、18世紀のフランスよりも、ヨーロッパ文明全般のより進歩した諸条件の下に、そしてはるかに發展したブルレタリア階級を以てて、この変革を遂行するものであるからである。ドイツに向つて、ドイツのブルジョア革命は、ブルレタリア革命の直接の前奏曲たりうるものと見なくてはならない」と。これは明らかに、イギリスが世界革命の引き金ではなく、ドイツとブルジョア革命が世界革命の「直接の前奏曲」であると規定してゐる。つまり、「共産党宣言」は、2つのベクトルを持った世界革命論である。尚

分解してはいるが太古からの土地所有の一形態であるロシアの農民共同体は、共産主義的共有のより高い形態に直接移行しうるであろうか？それとも反対に、そのままでロシア革命が西ヨーロッパに於けるプロレタリア革命への合図となり、その結果両者がたがいに補うならば、現在のロシア共有制は、共産主義発展の出発点として役立つことができる」にも注目しておかなければならない。

「共産党宣言」は、世界革命の觀点を抜きには、ありえない。かかる觀点を独立させ、切り離して「ブルジョア階級に対するプロレタリア階級の斗争は、内容上ではないが形式上は、何よりも、第一に国民的斗争である」だけを理解してはならない。マルクス主義の修正は、世界革命論を棄てた瞬間に誕生する。それ故こそ、われわれが確立すべき綱領は、レーニンも綱領の性格と内容の中で展開している様に、第一義的に世界的・國際主義的なそれでなくてはならないのであり、綱領の原則的部分の展開の中に、世界的基底を有するのである。

(e) 革命党とプロレタリア<sub>階級</sub><sub>独裁</sub>

「共産党宣言」には、「プロレタリア独裁」という言葉は、みあたらぬ。しかし、概念は確立していないとも内実がある。「プロレタリア階級がブルジョア階級との斗争のうちに必然的に階級にまで結集し、革命によって支配階級となり、支配者階級として強力的に古い生産（諸）関係を廢止するならば、この生産諸関係の廢止とともに、プロレタリア階級は、階級対立、階級一般の存在条件を、したがって階級として自分自身の支配を廢止する」（同）と言う様に、これはまさしくプロレタリア<sub>階級</sub><sub>独裁</sub>である。

## (f) 革命党と組織

マルクスとエンゲルスは、「1850年3月の中央委員会の同盟員への回状」の中で次の様に言っている。「兄弟、1848年149年の革命の二年間に、同盟は二重に試験に合格した。…だが、それと同時に、前には強固であった同盟の組織がひどくガタガタになってしまった。…個々の地区や班が中央委員会との結びつきをゆるめ、しだいに眠りこませた」と。何故「ひどくガタ」になってしまったのであるか。それは、(a)の資本主義批判にみられる一種の自然発生的革命觀に第一の原因があり、第2に、(c)で指摘したごとく、ブルジョア政黨との組織的区別の曖昧さに原因があり、第三の原因是、第一、第二に規定されて、共産主義同盟の陰謀家自由主義に求められる。エンゲルスは、その間の事情を以下のように言っている。「たやすく予見できたことであ

るが、いま起つている人民大衆の運動に対し、同盟は余りにも弱い兵士であることが判つた。以前に外国に住んでいた同盟員の四分の三が帰国したため住所が変わつてしまつていた。その結果、彼らの從来の班は大部分解体し、同盟との接觸を全然なくしてしまつたのである。また彼らのうち一部の野心家は、同盟との接觸を復活させ様ともせず、各々の自分の地方で自分の思惑による別個の小運動を始めた。そしておしまいに、それぞれの小邦、各都市の事情がまた非に違つていたので同盟は、全く一般的な指令以上のは、だせなかつた。しかし、そういう一般的な指令ならば、新聞によつてひろめる方がずつと良つた。つまり、秘密同盟を必要としていた原因がなくなつた。その瞬間から、秘密同盟としては、何の意味もなくなつたのである。しかし、他のものはともかく、つい先ごろその同じ秘密同盟から陰謀的性格の最後の影までもはぎとつた人々が、そんなことに驚くはずがなかつた。しかし、同盟が、革命的活動の立派な学校であつたことは、いまや証明された。「新ライン新聞」が強固な中心点となつていて、ライン地方や、ナッサウやライン・ヘッセン等々、どこでも同盟員は、最左翼の民主主義運動の先頭にたつた」と。マルクスとエンゲルスは

「新ライン新聞」を前線基地に、ド拉斯チックに進行するドイツ革命に、大胆な宣伝、暴露活動を開拓し、共産主義者同盟を民主主義運動の最左翼たらしめた。しかし他方、秘密活動の完全な停止は、「私的所有のない新しい社会を建設する」道をとざし、共産主義者同盟が、義人同盟の陰謀家集団から「同盟の諸決定に対する叛徒」を同盟員の義理とするプロレタリア革命党への飛躍に失敗したこと陰謀家の自由主義の前に敗北したこと意味していた。

(ii) 「1850年3月の中央委員会の同盟への呼びかけ」<sub>階級</sub><sub>独裁</sub>について

## (a) ドイツ3月革命の総括

マルクスとエンゲルスは、ドイツ3月革命を「1648年のイギリス革命とも、1789年のフランス革命とも混同してはならない」と述べ、強い口調で、ブルジョア階級の裏切りを非難する。「中間階級（→ブルジョア階級）は、彼らの最も古い、もっと不可欠な同盟者である農民に、たちまちそむいた。民主主義者も、ブルジョアジーにおとらず、私有財産の侵害とかいうものに仰天して、同じ様に農民を支持することを拒んだ、こうして三ヶ月の解放の後で、シユレージエンを中心とする血みどろの斗争と軍事的処刑を経て、封建制度が、昨日まで反封建的であったブルジョアジーの手で復活された。ブルジョアジーの罪状のうちでもこれ以上にいまわしいものは、他にない。歴史上のどんな党でも、自分の最良の同盟者にたいして、また自分自身にたいして、これまでの裏切りを犯したものはかつてなかつた」と。ブルジョア階級の農民と革命 자체の裏切りの根拠を、後年エンゲルスは、成熟した言葉で次の如く述べている。「これが独特的なのは、次の点である。それは、ブルジョアジーの發展途上には、一つの転期があつて、それから先は、

彼らの権力手段、したがって資本増せば、増す程、かえつて彼らの政治的支配の能力をへらすことにしかならぬ」と言うことである。……ブルジョアジーは、彼らの工業、彼らの商業、彼らの交通手段を發展させるにつれて、それと同じ割合で、プロレタリアートを生みだす。ある点迄くると……彼らは、彼らの分身であるプロレタリアートが、彼らの手におえなくなつてゆくことに気づきはじめる。この瞬間から、彼らは、独占的な政治支配をおこなう力をなくす。彼らは、同盟者を探し求め、そしてその時の事情次第で、その同盟者と支配を分かつか、あるいは、そつくりそれを譲り渡すかする」「ドイツでは、ブルジョアジーのこの転期は、すでに1848年にやつてきた。しかもこのとき、ドイツのブルジョアジーは、ドイツのプロレタリアートを恐れるといふよりは、むしろフランスのプロレタリアートを見て恐れをなしたのである」と、つまり、「ドイツ革命（8月革命）の敗北は、マルクスとエンゲルスは、「回状」で「1848年3月の運動の後で、ただちに国家権力を握り、との権力を利用して、自分の戦争であった労働者をさしこく、もとの被抑圧者の地位に押しもどしたのは、ブルジョアジーであつたと満腔の怒をこめて非難し、暴露したのである。

(b) 「回状」とブルジョア革命、戦略問題について  
マルクスとエンゲルスは、「3月にかたづけた封建党」と手を結び、「との封建的絶対主義党にあたたび、支配権を譲つた」ブルジョアジーに代わり、来たるべき革命は、民主主義的小ブルジョアジーを中心遂行されると分析され、内容的に1848年ブルジョア革命と相異したるものと規定する。小ブルジョアジーは、「何よりもまず、官僚制度を縮少して、國家の支出をへらすこと。そして粗税をおもに、大地主と大ブルジョアジーにかけること」を要求する。次に彼らは、公共信用機関の設置と高利取締り法との制定によって、彼ら自身と農民とが、資本家からではなく、國家から有利な条件で貸付を受けられるようにして、小資本に対する大資本の圧迫をとりのぞく政策的内容を同時にもりこんでいる。後者の要求は、1848年当時、あるいは、本来のブルジョア革命の歴史的課題からみだしている。この限りに於いて、小ブルジョア的所有關係を実施することを要求する」かかる小ブルジョアジーの要求は、「封建制度の完全な一掃」と言うブルジョアジー的内容と共に、小資本の防禦といふ社会

アートのバックアップも不可欠としていた。マルクスとエンゲルスは、「小ブルジョアジーの改良的限界性故に、格をも有しているのであり、それ故にこそ、プロレタリアートで、ドイツ自由主義的ブルジョアが、1848年に人民に演じた役割、これはなげなし裏切り的な役割は、来るべき革命では、民主主義的小ブルジョアジーによつて引き継れるであろう。今日では、民主主義的小ブルジョアは、反政府派の中で、1848年以前の自由主義的ブルジョアジーと同じ地位を占めている」と言う。

かくして「回状」のブルジョア革命は、小ブルジョアを中心遂行され、その本質に於て、ブルジョア的改革でありながら、プロレタリアートのバックアップを必要とする限りに於て「多かれすくなれ、社会主義の方策を提設」しなければならない特異なブルジョア革命である。

(c) 革命党と小ブルジョア党  
革命党は、この特異なブルジョア革命に対し小ブルジョア党と如何なる区別と連関にあるのか。つまり革命党は小ブルジョア政党に対してもかなる態度をとるのか、かかる設問に對してマルクスとエンゲルスは次の様に回答する。「小ブルジョア的民主党に對する革命的労働者党の態度はこうである。革命的労働者党は、自分が打倒しようとする分派と斗うためには、小ブルジョア民主党と共同する」「だが、民主党が自分自身の利益のために地歩を固めようとする場合には、民主党に反対する」と、では革命党は、小ブルジョア党が、体制内改良派に歩み、反動へ変質する「あらゆる場合に反対するため、いかなる組織的、政治的準備をすべきなのか」「回状」は、次の様に言う。「斗争の最中にも、斗争のあとでも労働者は、機会あるごとに労働者自身の要求を押しさなければならぬ。労働者は、民主主義的ブルジョアが政府掌握する準備にかかったならば、すぐさま労働者のための保障を要求しなければならない。必要なならば力ずくでももぎらねばならないし、一般に新統治者にありとあらゆる讓歩を約束させ義務を負わせる様にしなければならない」と。そして「回状」は、力ずくで労働者階級の保障を克ち取るためにも、労働者の武装組織が絶対に不可欠であると述べている。「勝利の瞬間から労働者を裏切りはじめたこの党に精力的に、威嚇的に対抗できればならない」と。労働者は、どんな口実があるためには、労働者は武装され、組織されなければならぬ……労働者は、自分で選んだ隊長と、自分で選んだ独自の参謀部とを持つ独自のプロレタリア警備軍を組織して、國家権力の指揮ではなく、労働者によつて打ち立てられた革命的市町村設立の指揮下にはいることを、これに沿つて、武装解除のあらゆる試みを紛糾しなければならない。労働者は、どんな口実がもちだされても、武器弾薬を手離してはならない。必要なならば暴力に訴えて、武装解除のあらゆる試みを紛糾しなければならない。労働者に對するブルジョア民主党の影響をうちくだすこと。労働者をただちに独自の武装組織に編成すること、一時的を避けられないプロレタリアートの独自的組織化を「労働者、ヨア民主党支配に對して、できるだけそれを困難にし、その信用をおとさせるような条件をおしつけること。これが来るべき蜂起の最中とその後にプロレタリアートが、従つて同盟が見失つてはならない要点である」と。

(d) 革命党の独自的組織化  
マルクスとエンゲルスは、革命斗争の最中に上記の同盟が見失つてはならない要点を貫徹するために、平時からのプロレタリアートの独自的組織化を「労働者、ヨア民主党に對して、できるだけそれを困難にし、その信用をおとせることを目標としなければならない」と訴える。彼等は、かかる労働者党の独自的組織化の組織原則は、「厳格な中央集権化」であると規定し、中央集権主義を

実現することが、眞の革命党の任務であると結論を下す。ドイツの月革命の敗北を契機に、マルクスとエンゲルスの党組織觀は深化し、遂に「回状」に於いて、「公然と労働者の獨自的組織化と党の中央集権化を主張する。我々は、マルクスとエンゲルスの「労働者党の」獨自的組織化と中央集権主義の党建設、組織觀点、及びレーニが、經濟主義者との斗いで復権させたこの原則を繼承し、發展させなければならず、全ゆる組織問題は、この觀点から立てられ、解決、決定しなければならない。

①来れるべき革命は、小ブルジョアジーを中心とする特異なブルジョア革命である。

②革命党は、二度と「ブルジョア民主主義者に喝采を送る合唱隊の役をつとめるまでに身をおとしめ」ることがないために更には、プロレタリアートの独自な權力をうちたるため中央集権主義で武装した、プロレタリアートの獨自の党でなければならないこと。以上の2点から、マルクスとエンゲルスは、共産主義者同盟の「規約」改正を断行する。1848年の「規約」第一条と1851年の「規約」第一条を比べてみよう。1848年の「規約」は「第一条、同盟の目的は、ブルジョアジーを打倒し、プロレタリアートの支配をうちたて、階級対立にもとづく從來のブルジョア社会を廢止し、階級なく、私的所有のない新しい社会を建設することにある」となつており、1851年の「規約」第一条は、「共産主義者同盟の目的は、宣伝と政治斗争のあらゆる手段をもちて、旧社会を破壊し、およびブルジョアジーを打倒し、プロレタリアートの精神的・政治的および經濟的解放をなしとげ、共産主義革命を遂行することである。同盟はプロレタリアートの斗争が経過すべきさまざまなる發展段階に於いて、つねに運動全体の利益を代表する。同盟はまた、プロレタリアートのあらゆる革命勢力を自己のうちに結合し、組織することにつとめる。同盟は秘密結社であり、プロレタリア革命が、その終局目標を達成する迄は、解放することができない」とある。1848年の第一條が一般的に「新しい社会を建設する」とが目的になつてゐるのに較べ、1851年の第一条は、かかる目的のための手段、革命党的組織政策、組織性格、組織の目標を中心にとりこみ、プロレタリアートの「經濟的解放」と革命党建設が不可避的連関にあることを主張し、「党」の思想を明確に想起している。我々は、1848年「規約」第一条に比して、1851年「規約」第一条が、革命の目的を具体的、実践的に対象化していることとりわけ、「党」の思想を明瞭に打ちだしている点について、これを継承しなくてはならない。

次に「加盟」（採用）の項をみてみよう。1848年「規約」の50条は「班長は、加入希望者に規約一条から第四九条まで読みかせ、これを説明し、加入者の負う義務を短い式辞のなかでとくに強調する。ついで次のような質問を提出する。「では君は、この同盟にはいることを誓わせ、同盟員になつたことを宣言し、次の班長会議のさいにこれを班に紹介する」。他方1851年「規約」では、第三条で「採用は、班の全員一致の決定によ

る。採用は、班会議の全員会議で班長がこれをおこなり、「採用」と述べている。この2つの規約の相違は、一見してわかる。それは、加入者の負う「義務」に関する事柄である。1847年の「規約」に於いて、加入者の負う義務は、同盟員の条件と同じ意味に使用され「とくに強調する」だけに止まつてゐるが、51年「規約」は、48年「規約」第2条の同盟員の資格（E）項を独立させることを義務する」必要を説く。いわば、「義務の中の義務を説く。この条件こそ陰謀家の自由主義に対するマルクス・エンゲルスの組織論的総括であり、中央集権主義に不可欠な内容なのである。

次に「除名」の項をみてみよう。51年「規約」が、第四条で「同盟所属の条件に違反したものは、除名される。個々人の除名についての決定は、その班の多数決による。地区指導班からの提議があれば、中央指導部は、個々の班を全体として除名することができる。被除名者は、同盟全体にこれを通してすべての疑わしい人物と同様に同盟の監視の下におく」と言つてゐる。この中でいわれている「中央指導部」が、一定の条件つきであれ、「個々の班を全体として除名することができる」権利を48年「規約」は全くうたっていない。中央指導部に除名の権利を与えることは、中央集権党にとって絶対に必要なのであり、かかる権利を中央が保持していないならば、中央は、地区の連絡会議以上の性格を決してもたないだろう。統制権を持たない党中央は、あつてない代物である。ゆえに、我々は、51年「規約」4条を継承、発展させねばならない。

最後に、中央委員会についてみていく。48年「規約」では「5章、21条、中央委員会は、同盟全体の執行権力であり、そういうものとして、大会に對して責任を負う。22条、中央委員会は、五名以上の委員からなり、大会開催場所の地区委員会によつて選ばれる。第3条、中央委員会は、指導地区との連合をおこなう。中央委員会は、3ヶ月ごとに同盟全体の状況について報告をおこなう」と述べており、51年「規約」もこの規定を基本的に踏襲しているが、中央委員会の機能は、飛躍的に強化、集中されている。このマルクス・マールは、同盟員間の紛争をあつかつてゐる51年「規約」17条である。「第17条、個々の同盟員のあいだの紛争は、終局的には、同一の班に属する者は班がこれを解決し、同一の地区に属する者の場合は地区相互の紛争は、中央委員会がこれを解決する。中央委員会に対する個人的な苦情は、大会の所管事項とする。同一の地区指導班が、これを解決し、異なる地区に属する者の場合は班がこれを解決し、地区委員会がこれを解決する。ただし、まことに場合には、地区委員会に、後の場合は、大会に上告することができる。大会は、更に中央委員会と同盟下級委員会との間に生じたすべての紛争を解決する」①大会は、中央委員会の所在地で開催されること。②中央委員会は、臨時大会を招集することができること。以

る。採用は、班会議の全員会議で班長がこれをおこなり。

同盟員は、同盟の諸決定に無条件で服従することを誓約する」と述べている。この2つの規約の相違は、一見してわかる。それは、加入者の負う「義務」に関する事柄である。1847年の「規約」に於いて、加入者の負う

義務は、同盟員の条件と同じ意味に使用され「とくに強調する」だけに止まつてゐるが、51年「規約」は、4

8年「規約」第2条の同盟員の資格（E）項を独立させることを義務する」必要を説く。いわば、「義務の中の

義務を説く。この条件こそ陰謀家の自由主義に対するマ

ルクス・エンゲルスの組織論的総括であり、中央集権主

義に不可欠な内容なのである。

上の①④を第17条に引き寄せて考えてみると、實際、この条項は、中央委員会が党内のあらゆる問題に「ゲモニーを持つことをうたつた内容であることは、一目瞭然である。

1848年ドイツ革命の敗北は、党的地方化、分散化を生んだ。来るべきブルジョア革命に対し、党を打ち固め独自な戦斗部隊へとつくり上げ、権力を獲得し、永続革命を完遂せんとするマルクスとエンゲルスは、中央集権党の飛躍をかけで、共産主義同盟の「規約」を改正した。「規約」改正は、すでにみてきた様に、そのことを内容で証明している。そして、この51年「規約」こそ、革命党の模範的規約の最初のものであり、継承しなくてはならない。

マルクスとエンゲルスは、ドイツ3月革命の敗北を教訓化し、新しい革命戦略、新しい党组织の性格に対応して、党規約を改めたのである。つまり、マルクス、エンゲルスは、綱領一組織一政治を各自の別々に切り離し、非連関的独立的に把えるのではなく、一つの体系を持った有機体として綱領一組織一政治を考えていた。我々の主張する綱領一組織一政治の三位一体論は、目新しいものではなく、1851年段階でマルクスとエンゲルスによつて確立された思想、党组织觀の継承にすぎない。

#### ■第一インター・ナショナルについて

1850年にマルクスとエンゲルスが予測した革命は、ついに起らなかつた。共産主義者同盟は、マルクスの時期早尚でかつ非科学的な陰謀家術策の方針をとるべきではないという強い説得にも拘らずウイリシヒ等は、ブランキ主義的方針を捨てず、分裂した。かくして1852年にケルンの共産主義者が有罪の判決を受けると共に、ドイツの自主的な労働運動の第一期の幕はおりた。1864年の第一インター・ナショナルの結成は、全世界の労働運動を单一の流れにまとめ上げる一方、ドイツの労働運動の第二期の幕を静かにあけた。

##### (a) 第一インター・ナショナルの限界

F・メーリングは、第一インターを次の様に評している。「インター・ナショナルは、決して恐ろしい手段を用いて行動する秘密結社ではなかつた。プロレタリアートの抑圧者はそれを恐怖し、その影におびえけれども。インター・ナショナルはもっぱら労働者を元気づけ、強化し、前進させる倫理的な力だった。そういうものとしてインター・ナショナルは19世紀の歴史の画期的な事件だった」と。第一インターは何故、ブルジョア支配階級が恐怖し、おびえていた「行動する秘密結社」として組織されず、「倫理的な力」に止まつたのか。かかる設問に對し、エンゲルスは「この協会（第一インター）は、ヨーロッパとアメリカの戦争プロレタリアート全体をうつて一丸とすると言うはつきりした目的をもつてつくりられたのだから、「宣言」に述べられた諸原則をすぐさま宣言する訳にはいかなかつた」と回答する。つまり「諸国労働者階級のプロレタリア的統一戦線をきたえ上げる」（レーニン）ことを第一インターの任務として設定したこと自体に「行動する秘密結社」たり得ない根拠があつたのである。我々の中に於いても、「そもそも、第

一インターの思想性と組織性は、マルクスの本来の立場からすれば多分に妥協の產物であつた」（広松涉）と言ふ評価、第一インターに対する過少評価がある。我々は

F・メーリングや広松涉が言う様に、第一インターの一定の限界を認めるが、その中にマルクスとエンゲルスの、党组织觀上の発展、つまり思想性と組織性の発展を次のことの中に把み出すことができる。

##### (b) 第一インター・ナショナル創立宣言と資本主義批判―労働者階級の分析―

「創立宣言」は1848年から64年に至る間に、労働者大衆の貧困が減少しなかつた頗著な事實を、第一に指摘し、その間の労働者階級の状態について次の様に言つてゐる。「どこでも上層階級の人間が社会的階段をのぼっていくのと少なくとも同じ割合で、労働者階級の大多数は、さらに一段と低く沈んでいった。機械の改良も科学の生産への應用も、交通機關の新機軸も、新しい殖民地も、海外移住も、市場の開拓も、自由貿易も、あるいは、これらすべてを合せたものも労働大衆の貧困をなくすことはできず、労働の生産力の新たな発展は、現在の欠陥のある基礎の上では、常に社会的対比を深くし、社会的敵対を鋭くする結果とならざるを得ない」ということ、「この目まぐるしい経済的進歩の時代にあって、英帝国の首都で餓死がほとんど日常事の地位を占めるに至つた。商工業恐慌と呼ばれる社会的疫病が、いつそう頻繁にくりかえされるようになり、その範囲が、いつそり広くなり、その結果が、いつそう致命的になつたことが、世界史上のこの時代の特徴である」と。かかる労働者階級の分析こそ「党宣言」からの思想的深化である。すなわち「党宣言」は、生産力と生産關係の矛盾→恐慌→革命と言ふシェーマを立てていたのに對し、唯物史觀を「資本主義批判へと成熟、深化させていたマルクスによって書かれた「創立宣言」は、生産力と生産關係の矛盾→階級対立の非和解性の増大、一方での富の蓄積と他方、プロレタリアート側での貧困の蓄積、くりかえしの恐慌→生産力がもう発展できる余地のない程の発展、階級対立の極限的→極化（分解）、富と貧困の拡大再生産→革命と言ふシェーマを採用している。マルクスとエンゲルスは敗北の経験と理論的研鑽の成果を第一インターナショナルの中に反映させている。

##### (c) 第一インター「規約」と革命党

前項の思想的発展、深化は、当然にも規約上の問題へと実践的深化する。「労働者階級の解放は、労働者階級自身の手で取らねばならない。労働者階級の解放の斗争は、階級特權と独占をめざす斗争ではなく、平等の権利と義務のための斗争を意味すること。労働手段、すなわち、生産源泉の独占者への労働する人間の經濟的隸属がありとあらゆる形態の奴隸制、あらゆる社会的悲惨、精神的退廃、政治的從属の根底にあること、したがつて労働者階級の經濟的解放が大目的であつて、あらゆる政治的運動は、手段としてこの目的に從属しなくてはならない」。この「規約」前文は、革命党が革命党であるための原則を述べている。プロレタリアートの階級的被抑圧の根底は「經濟的な隸属」にあること。精神的退廃社会的悲惨、政治的從属は、その結果である。それ故に、プロレタリア革命党の目的は、「労働者階級の經濟的解

放」が大目的であつて、政治的解放は、「手段」である

義務として、この目的に従属させねばならない。かかる

目的と手段の明確な区別は、共産主義者同盟の 1851

年改正「規約」では確立されておらず、「精神的、政治

的、および経済的解放を成しとげ」という具合に、労働

者階級の経済的解放という大目的の意義が鮮明にされて

いない。我々は、第一インター・ナショナル「規約」前文

のこの通りこそ、マルクス・レーニン主義の思想的地位

の最良の綱領的表現として、継承しなくてはならない。

(d) 第一インター・ナショナル「規約」と規約第 7 条(a)項

について

ところで、かつて我々が陥ついていた第一インター・ナショナルに対する過少評価、すなわち、合法的組織で、その組織性は「マルクスの本来の立場からすれば多分に妥協の産物」は本当にそうなのであろうか。もしもそうならば、我々が前節でみてきた 1848 年の「規約」と 51 年「規約」の対比や、その根底に流れる綱領組織

一政治と言う観点、マルクスとエンゲルスの党組織觀は、捨象されたことになる。いや違う、この疑惑をはらすのが規約第 7 条(a)である。「第 7 条(a) 有产階級の

集合的な力に対する斗争に於いて、プロレタリアートは、規約第 7 条(a)である。【第 7 条(a)】

有产階級によつてつくられた全ての古い政党に対する別個の政党に自分を組織することによつてのみ、階級として行動することができる。この様にプロレタリアートを

一つの政党に組織することは、社会革命とその終局目標たる階級の廢止の勝利を確保するのに不可欠である。す

べの斗争を機として、役立なければならない。土地の貴族と資本の貴族は、常にその政治的特權を、彼らの経済的独占を擁護し、永続させ、労働を隸屬させるため

彼等の経済的独占を擁護し、永続させ、労働を隸屬させるために利用しているので、政治権力の獲得は、プロレタリアートの違たな義務となつてゐる。これで、規約第 7 条(a)が 1851 年「規約」前文の後半部の繼承、発展であることが明らかになつた。この発展、深化の鍵は、地主階級とブルジョアジーが、その特權（政治的）を、

また労働者階級の手中に於いて、自己の搾取者に対する搾取を擁護し、永続させ、労働を隸屬させるため

に利用しているので、政治権力を獲得は、プロレタリアートの違たな義務となつてゐる。これで、規約第 7 条(a)がある限り、中央集権主義の根本原則は「規約」を貫らぬいでいる。

(e) ゴ・ル・タ綱領批判

(a) パリ、コ・ミューンとマルクス、エルゲルス

1871 年、パリは、ベルサイユに単食ラテイエール政権に宣戦を布告し、3 月 26 日、違たなパリ・コ・ミューンを創建した。28 日にその成立が宣言され、30 日ゴ・ミューンは徵兵制と常備軍を廃止し、兵役にかかる全ての市民の属すべき国民軍が唯一の武装力であると宣言して

た。こうして「あらゆる社会改革の第一の経済的必須条件」を満したコ・ミューンは、家賃の棒引き、市設質屋の

質物売却の禁止、教会財産の国有化、コ・ミューン議員の

奉給を最高 6 千フランとする。協同組合の結成、夜業の廃止、等々の社会生活全般にわたる諸改革を実施した。

この間の事情を「フランス於ける内乱」の序文には、次

18 日以降鋭く、くつきりと表われてきた。コ・ミューンには、ほとんど労働者、または折紙つきの労働者の代表だけしかいなかつたので、その諸決定も断然プロレタリア

的性格をおびていた。それらの決定が命じてゐた改革は、

共和主義的ブルジョアジーが、たゞ法的なために怠つた

もので、労働者階級の自由な行動のために必要な基礎で、ある様な諸改革……であったから始まつた総攻撃は、か

くつきりと表われてきた。コ・ミューンは、18 日以降鋭く、くつきりと表われてきた。コ・ミューンは、

18 日以降鋭く、くつきりと表われてきた。コ・ミューンは、

意義を述べてゐる。つまり第一の意義は、プロレタリア階級が、権力を共和主義者にゆずらなかつたことであり、第二に、支配者階級の国家機構を人民政府機構に置き換えたことである。我々は、マルクスが第一の画期的意義として挙げた内容が、1848年以降のマルクスの革命の経験と世界同時革命論（永続革命論）からして当然だと考える。そして第二の意義も「ルイ・ボナパルトのブルューメルの18日」の中で引きだした。プロレタリアートはできあいの国家を利用することはできない。ブルジョア国家機構を粉碎しなければならないと言う結論の確認であると同時に、この命題を更に発展させたものとして了解できる。他方、エンゲルスは、コミニーンを総括して次の様に結論を下してゐる。「コミニーンは、そもそものはじめから、次のことを認めなければならなかつた。すなわち労働者階級は、いつたん支配権を獲得しながら、古い国家機構を用いてものごとを処理していくことはできない」ということ。この労働者階級は、いま獲得したばかりの自分の支配権をまたもや、失うまいと思えば、一方では、これまでの彼自身の圧迫のために利用されてきた古い抑圧機構をすべて取り除かねばならず、他方でまたいかなる例外もなく、彼自身の議員や役人の全てをいつでも解任できると宣言することで、この人々から自分の安全を確保しなければならないということである」と。以上でも判る通り、パリ、コミニーンから引きだした結論と教訓は全く同一のものであり、彼等二人はコミニーンの中で鍛え上げられた。マルクスとエンゲルスは「その持ち前の熱意と情熱の全てを擧げてこの大衆斗争を経験したのである」（レーニン）。そして国家と革命に関する真理を発見したのである。この結論こそ修正主義（マルクス、レーニン主義を分つ古くて新しい基準

(b) 「ゴータ綱領批判」と批判のスタイル

月14日15日の両日にわたった前段討議を踏え、同5月22日と27日にかけて開かれたゴータ大会で実現した。ゴータ綱領は、この大会で採択されたドイツ労働者党の綱領を指す。マルクスは、ドイツ労働者党の綱領が草案段階のうちに「ゴータ綱領批判」を激しい怒り<sup>(リ)</sup>をもって書き上げている。この遂条的な批判によつて、ゴータ綱領は、かしやくない鋭さを以つて批判され、草案の弱点が暴露された。 そればかりではなく、かかる批判のスタイルによつて、「ラサールが運動に入つて以来とつてきた立場に対するマルクスの立場が明確に説明され」（エングエルス）た。F・マーリングは「ゴータ綱領批判」とそのスタイルについて「いつもは、労働者運動をたえずその大きな脈絡においてみていたマルクスは、この時は余りに微視的な視点にとらわれて表現のちよつとしたまづき、不統一、不正確さの背後に、じつさいありもしない底意を探したのである」と非難している。つまり彼には綱領はどうでもよい事柄であったのであり、党を堕落させる綱領が持つ犯罪的役割を理解していかなかつた。綱領の表現上の不正確さ、不統一、曖昧さは、プロレタリアートの階級斗争を組織し、そしてプロレタリアートによる政治権力の獲得と社会主義－共産主義社会の組織、

(c) ハリ二三二日と一二日分紅領批半

pari、コミニーンの教訓を、コレタ編領批判の第四章 Aで次の様に生かされている。「資本主義社会と共産主義社会との間には、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期照応して、また政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外の何ものでもありえない」と。明らかにこれは、(a)項で述べたパリ、コミニーンの第2の画期的意義の深化であり、資本主義から共産主義への過渡期（的段階）が存在し、その国家形態は、「プロレタリアートの革命的独裁」であることが述べられている。我々は、この過渡期の概念を、現在の中国共産党の革命的実践（実験）等の考察の中から一層発展させる必要がある。そして、その場合、革命党は「ソロトクナシ」の手段ではなく、過渡期「ヒオリ」の手段ではなく、過渡期「ヒオリ」

(c) 現実の運動の一歩一歩は……

とするこの斗争を指導するプロレタリア革命党的任務をあやまらせ、旗色をごまかし、プロレタリアートの利害を裏切り、多大の血を強制することになるのである。それ故、綱領は、初めの一匁から終りの言まで、プロレタリアートの利害を反映しなければならないのであるし、決して曖昧にすることは許されない。「原則の取り引きはいっさいの応じない」と言う立場、マルクスの「ゴータ綱領批判」の批判スタイルを、我々は継承し、マルクス・レーニン主義と修正主義の分界線を一点の曇りもなく明らかにし、この方法を媒介に、修正主義、反スターマルクス主義を徹底的に批判し、その反労働者の思想、組織、政治内容を暴露していくかねばならない。そして革命党建設の事業に於いてもこの原則を買ら抜き通さねばならない。我々がこの原則を放棄するならば、我々の死をも意味するのである。更に、マルクスのこの批判のスタイルは、レーニンの綱領論争の方法としても受け継がれているものであり、「それは、ラサールの経済学上の原則ばかりでなく、戦術についても説きおよんでくる」（エンゲルス）と言う様に、綱領・組織・政治の三位一体的の批判としての逐条的批判であるということである。

## 階級斗争を組織し、労働者階級の経済的従属からの解放を目的

### (e) 革命党と共産主義社会の第一段階

マルクスは「ゴータ綱領批判」の中で、共産主義社会の第一段階を次の様に描写している。「たとえば、社会的労働日は、個人的労働時間の総和からなり、個々の生産者の個人的労働時間は、社会的労働日のうちの彼の持分である。個々の生産者は、これこれの労働（共同の元本のための彼の労働力を控除したうえ）を給付したという証明書を社会から受け取り、この証明書をもって消費手段をもつて消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい量の労働が費やされた消費手段をひきだす。個々の生産者は、自分が一つのかたちで社会に与えたのと同じ労働量を別のかたちで返してもらうのである」と。続いてマルクスは、第一段階の共産主義社会の特徴的性格を指摘して、「ここでは、明らかに商品交換が等価物の交換である限りで、この交換を規制すると同じ原則が支配している。内容も形式も変化している。なぜならば、変化した事情の下では誰れも自分の労働の他には何も与えることができないし、また他方、個人的消費手段の他には、何も個人の所有には移りえないからである。しかし、個人的消費手段が個々の生産者のあいだに分配される際には、商品等価物の交換の場合と同じ原則が支配し、「一つのかたちの労働が別のかたちの等しい量の労働と交換されるのである。だから、ここでは、平等な権利は、まだやはり原則上一ブルジョア的権利である。この平等な権利は不平等な労働にとって、不平等な権利である。……それは、労働者の不平等な個人的天分と、したがつてまた不平等な給付能力を、生まれながらの特權を暗黙のうちに承認している。……さらに或る者は結婚しており、（等等）だから労働の出来高は等しく、したがつて社会的消費に元本に対する持分は、平等であつても、ある者は、他の者より、事実上多く受け取り、ある者は、他の者より富んでいる等々。すべてこういう欠陥を避けるためには、権利は平等であるよりも、むじろ不平等でなければならない」と述べる。そして最後にマルクスは、「共産主義社会は、あらゆる点で経済的にも、道徳的にも、精神的にも、その共産主義社会が生まれでてきたり胎たる旧社会の母斑をまだおびている」と。ところでマルクスは「批判」の中では、かかる共産主義社会について革命党を存在するのかどうかと言う設問に対する回答を用意していない。しかし、1851年「規約」前文、1864年第一インター「規約」前文、とりわけ後者の「労働者階級の経済的解放が大目的」と述べてゐる様に、プロレタリア革命党は、この大目的のために、國家権力を打倒し、政治権力を獲得するのである。資本主義社会の母斑を未だおびてゐる共産主義社会の第一段階に、革命党が存在するのは自明のことであった。そもそもプロレタリア革命党が「経済的にも、道徳的にも、精神的にも」完全に解放されていない段階に消滅すると考える発想自体が、反マルクス、エンゲルス的であり、共産主義の第一段階に於いて革命党は、不斷に階級斗争を組織し、プロレタリア階級を終局へと導びく任務があ

る。

### (f) 革命党とプロレタリア国際主義

マルクスは、「ゴータ綱領」のブルジョア的な自由平等の国際主義を第一章（5）で批判している。すなわち、「共産党宣言」の労働者階級の階級斗争は、内容的にではなくが「形式の上で」民族的であるといふ條を引き合へしながら、「……そしてドイツ労働党は、その国際主義は何に帰着させるのが？」と問題を設定し、次のように空語を支配者階級とその諸政府とに對する共同の斗争に於ける労働者階級の國際的親睦に代用され様と/or/ある。すなわちドイツ労働者階級の國際的な職分について、空語を支配者階級とその諸政府とに對する共同の斗争にては一言もいわれてしないのだ！しかも彼らは：自國のブルジョアジーとビスマルク氏との國際主義的陰謀政策に、このようやり方で対抗しようといふのである」と。マルクスは、「ゴータ綱領」の國際主義が、自由貿易主義者の經濟侵略、ビスマルクの國際主義的陰謀政策に對抗し、それを實際的に阻止しうる代物でないことを暴露し、プロレタリアートにとつて実践上、一文の値打ちもない。この様な國際主義を打ち捨て改める様に主張している。この主張は、第一インターナショナル創立宣言の末尾で労働者階級が國際主義の秘密に精通して、各自の國の政府の外交行為を監視し、必要な場合は、その力に及ぶあらゆる手段を用いてこれを妨害し、またそれを阻止できない時には、力を合せて、一齊に彈撲すべきであることを説き、「こりした對外政策のための斗争は、労働者階級の解放のための一般的斗争の一部である」と結んでいる主張の延長上にある。「党宣言」以降一貫してマルクスとエンゲルスが貫ら抜き通してきたプロレタリア国際主義を「創立宣言」は明瞭に定式化している。今日、日本帝国主義のインドシナへの反革命的介入、沖繩を朝鮮南部への侵略に對し、「その力の及ぶ、あらゆる手段を用いてこれを妨害」することを放棄し、侵略と斗わんとする我々の背後から襲い陰謀をたくらむ反革命分子がマルクス主義の仮面をかぶつて存在している。現下の情勢の下で「創立宣言」の國際主義の命題は、増々重要性を増していく。我々が本当に反帝反米反社帝プロレタリア独裁と共産主義革命と反米反買弁反封建民族解放斗争主義革命との結合を望むならば、断固としてごの命題を貫徹する必要がある。

### (v) エルフルト綱領批判

1891年10月14日から20日迄、エルフルトで開催されたドイツ社会民衆大会で採択された綱領が「エルフルト綱領」である。この背景には、社会主義者鎮圧法の清算があり、この悪名高き悪法が労働者階級から奪った儀式は測り知れないものがあった。しかしドイツ社会民主黨は、社会主義者鎮圧法によって鍛え上げられ、強國な革命运年に成長した。その間の事情についてF・メーリングは、「初陣に赴いた時の社会民主党はいまだ伸びる四肢を持ち、さささまな看護で頭がひつぱいの若者だったが、戦場から戻った時には、風雨に耐え抜いた屈強のつわも

のになつてゐた。決断力を持ち、敏速で明確な頭脳を持つ、どんな強い敵をも打ち負すことのできるつわ者になつっていた」と卓越した比喩で述べている。しかし、当時のドイツ社会民主党は屈強なつわ者であると言う自負心と、社会主義者鎮圧法が復活されはしないかと恐怖心が半ば両存していた。「エルフルト綱領」は、第一インターの「規約」を手本としつつも、肝心な箇所で第一インターの「規約」をねじ曲げるか、裏切っている。かかる根拠は、ドイツ社会民主党の自負心と恐怖心との両存の中にある。

(a) 革命党とプロレタリア独裁

「エルフルト綱領」の最大の裏切りは、プロレタリア独裁に関してである。後年、レーニンは、「国家論ノート」の中でエンゲルスがエルフルト綱領批判に於いて、直接に日和見主義と斗い「プロレタリア独裁」の定義を復活させたと書いている。この主張は正しく、「エルフルト綱領批判」でエンゲルスが言いたかった事柄をすばり指摘している。エンゲルスは、この綱領を批判して、「草案の政治的諸要求は、一つの大きな誤りがある。本来いわばならないことが、そこには書かれていない」と述べている。では本来言わねばならないこととはいつたい何んであり、何故に、かかる重要なことが草案にしかれていたのか。エンゲルスは、この設問に対しても、「帝国憲法は、1850年のプロシア憲法の純然たる引きうつしである。……そこでは、政府が全権を握っている」だからこそ、リープクネヒトが、「この帝国議会を絶対主義の（陰部をおおう）いちじくの葉と名づけたのである。諸々の小国家とドイツ国家連邦との存在を公認する憲法を基礎にして、いっさいの労働手段の共有財産への転化を実行することは、明白に無意味であつた」と答える。以上の様にドイツの国家分析をしたエンゲルスは、更に続け、「そうすることがどれ程、必要かと言うことは、社会民主党の新聞・雑誌にはびこつてゐる日和見主義が、正に今日これを証明している。社会主義者綱法が復活されはしないかと恐れ、またこの法律が施行されていた當時になされたいろいろのはやまつた言明を記憶していることから、いまやにわかに党がそのいっさいの要求を平和的な方法で達成するのにドイツの現在の法的状態で十分であるとみなすのである」「まるでドイツでは、この社会は、その上にまだ半絶対主義的な、おまけに名状しがたい程に混乱した政治的秩序の桎梏の破碎しないでもすむ力の様であると」。つまり本来いわねばならないことは、ドイツには、他ならぬ共和制と自由とがないのであるから、もっぱら平和的なもっぱら合法的な道を夢みることは無意味であること、絶対主義的な名状しがたい程に混乱した政治的秩序を粉碎しなければならないと言うことであった。かかる事が草案に名記されなかつたのは、先にも述べた社会主義者鎮圧法が復活されないかという恐れにあつたのである。エンゲルスは、ドイツ社会民主党の日和見主義とプロレタリア独裁の放棄、を批判する。「この様な政策は、結局は、自党を邪道に導びくことにしかならない。一般的な抽象的な政治問題を表面に押しだし、そうすることによって当面の具体的な問題を隠蔽し、しかも、この後の問題こそ、なにか重大事件が起りしだい、

なにか政治的危機がおこりしだい、ひとりでに日程にのぼってくる問題なのである。こういう状態では、決定的な瞬間にあって党が突然とほうにくれてしまうという結果にしか、まだ一度もそれについて言議したことがないために、もつとも決定的な諸点について不明瞭と不一致がみなぎつてゐるという結果にしか、なりようがないではないか。……この様にそのときの目前の利害のために重大な主要観点を忘れる。この様に後日の結果を考慮せずに瞬間の成功を求める狙うこと、この様に運動の現在のために運動の未来を代表することは、まじめな気持でなされているかも知れないが、やはり、日和見主義であるし、又、常にそうであった。そして「まじめな」日和見主義こそ、おそらく全ての日和見主義のうちで最も危険なものである。ところで、このきわどい、だが非常に根本的な諸点というのはどういうものなのかな?、第一の点、もしこの世に何か確かなことがあるとすれば、それは、わが党と労働者階級とが、ただ民主的共和制の形態のもとでのみ支配権に致達することができるという点である。この民主的共和制は、すでにフランスの大革命が示した様に、プロレタリアートの独裁のための特有な形態である」だが「ドイツでは、公然たる共和主義的な党綱領をかけることさえ許されないと言う事実こそは、この共和制を、共和制ばかりか、共産主義社会をも、快適な平和的な方法で樹立できるかの様に考える幻想がどんなにとほうもないものであるかを証明するものである」と。要約すると、ドイツのプロレタリア革命が民主的共和制を通じて達成されることを指摘し、この民主的共和制は、天から降りてくるものでないこと。プロレタリアートが実力によつて帝國憲法体制を粉砕していくければならないこと。更にかかる粉碎の中でドイツを改編し小邦分立状態をとり除き、民主主義的共和制を実現し、より大きな自由を克ち取らねばならないこと。この自由を条件として民主共和制が、不可避的に生みだす階級斗争の著しい激化を革命的に利用し、プロレタリア独裁を実現せねばならないことである。エンゲルスにとってドイツ社会民主党がプロレタリア独裁を放棄したと感じるのは、全く当然である。おそらく、マルクスが生存していたら全く同一の結論を導びきだすであろう。何故ならば、ここでのエンゲルスの見解は、48年以降の見解の再確認であるからである。我々は、プロレタリア独裁を守り、この下に、この違大な義務を果すために全力を傾注しなければならない。社会帝國主義はプロレタリア独裁を放棄している。マルクス・レーニン主義の真髄は、プロレタリア独裁の学説であり、革命党の重大な試金石である。

(b) 「エルフルト綱領批判」と資本主義批判

党を一貫して、綱領一組織一政治の三位一体とするマルクスとエンゲルスは、資本主義批判の深化を確実に綱領一組織一政治の中へ反映させている。では、エルフルト綱領批判に於ける資本主義批判の深化とは何か。「株式会社による資本主義的生産は、すでに私的生産ではなく、多数の人の協同効率による生産である。もし又、株式会社からすんで、幾多の産業部門を支配し、独占するトラストに移るならば、そこでは、私的生産がなくなるだけでなく、無計画性もなくなる」と

(四節) の述べてゐるそのこと。すなはち、「資本主義生産の本質に根ざす無計画性」は「大いに改善」する必要があるという条りには、「さりみてとれる。エンゲルスが提起した命題は、資本主義が産業資本主義から帝国主義へ転化し、独占資本主義に到つたことの反映であつた。かかる資本主義批判の深化は、資本主義の転化をえぐりだしたエンゲルスは、帝国主義が階級対立を緩和するのではなく、逆に増え階級対立は激化すること、そして「生活の不確かさ」が確実に増大することを明らかにしてゐる。こうしたプロレタリア革命の序曲とでも言うべき情勢が生まれ始めてゐるのに、ドイツ社会民主党は、<sup>背中</sup>プロレタリア独裁を放棄してしまつたのである。

## 第二章 レーニン党組織觀について

我々は、前章で、マルクスとエンゲルスの党組織觀が綱領一組織一政治の一体的展開に基礎づけられてゐること、そして中央集権主義、プロレタリア國際主義、プロレタリア<sup>統一</sup>独裁が革命党の不可欠の条件であることを<sup>まだ</sup>うが革命路線の深化と共に純化してゆくことをみてきた。そしてレーニンの党組織觀は、この党組織觀の直接的繼承であり、帝国主義段階に於ける創造的適用によつて完成されたものである。我々は、「何をなすべきか」の中にかかるレーニン党組織觀が最も良く表われてゐると考へる。その際、我々は、「何をなすべきか」の目的的限界性を踏え、狭義の党組織觀の觀点から分析していく。

### (1) レーニン党組織觀の時代的背景

1900年代の初頭、ドイツ社会民主黨を先頭に第2回インターナショナル加盟の主な政党は、帝国主義の「上昇期」が生みだしたブルジョア的、日和見主義に深く規定され、マルクスとエンゲルスの党組織觀の核心を洗いながし、エンゲルスが心配した右翼日和見主義的傾向を増々強めていた。ドイツ社会民主黨の日和見主義は、1905年イエーナ大会に於けるローザ派の勝利により一時期後退するが翌年のマンハイム大会でローザ派が事実上敗北すると再び勢力をもり返し、1908年ライプチ大会に於いて、完全な勝利を納める。こうした國際共產主義運動總体の右傾の中で、レーニンは革命が近いことを敏感に把えていた。しかもレーニンはロシアのプロレタリアートが、来るべき革命の國際的中心として最前線を荷うであろうと考えていた。レーニンは「ロシアの社會民主主義派が課せられてゐる國民的任務は、世界のただ一つの社會主義党もまだ當面したことのないようなものである」と述べ、「いまロシアのプロレタリアートは、測り知れない程の、そつそつ苦しい斗争がせまつてゐる、歴史はいま、あらゆる日々のプロレタリアートに課せられたあらゆる當面の任務のうちでもっとも革命的な當面の任務を我々に提起している。この任務を實現し、ひとりヨーロッパだけでなく（今までこういうことができる）アジアをも含めた反動の最も強固な砦を破壊するならば、ロシアのプロレタリアートは、國際的な革命的なプロレタリアートの前衛となるであろう。そして、もしわれわれが、70年代の運動の千倍も広く、また深いわ

れわれの運動に、（當時と）同じ獻身的な決意と精力を鼓吹することができるなら、さきに我々の先輩である70年代の革命家が克ち得た尊称を、われわれも獲得することを期待してよいのである」とロシアのプロレタリアートの任務を述べた。これは、今日の日本プロレタリアートにも同一のことがいえる。日本帝国主義は、アメリカ帝国主義のインドシナに於ける完全敗北以降の極東アジアに於ける最大の反革命として、米帝の後退的世界戦略の要として機能し、革命的なアジア人民の苦しみの元凶となつてゐる。

多くのアジア人民をジャガーノート車輪の下に轟いてゐる。この日帝を打倒すること、そして米帝を更においつめること、更には新たな霸權を求めるソ杜帝をぶつめること、かかる任務こそ、一人日本プロレタリアートの利益ではない、革命的アジア人民全体の利害に完全に一致する。我々がこの任務を遂行し、極東アジア最大の反革命の壇を破碎するならば、日本のプロレタリアートは、先行する中国、ベトナム、インドシナのプロレタリア人民が形成する前衛の一角となるであろう。

### (2) レーニン党組織觀

以上のロシア社會民主主義者に課せられた栄光ある任務を果すため、ロシア社會民主主義運動の危機を揚棄し、来るべき革命に向けて何を準備し、當面の緊要の課題としていたい「何をなすべきか」。それは、革命理論に導びかれ、意識的、計劃的に革命組織し、準備し、練り上げ、革命斗争を實際に指導できる能力を持つた单一の中央集権主義で武装した職業家革家の集團の建設に他ならない。レーニンは、ドイツの社會主義運動がつよくなった原因を分析した後、ロシアのデマコーグが「運動が下からおこらないことは、よくないことである」と賢者がぶつてよろしくふれまわり、「学生からなる委員は役に立たない。それは腰がすわらない」と言う事に対し、「全く、その通りである。しかし、このことから生まれる結論は、職業革命家から成る委員が必要だとと言うことであつて、そういう職業革命家に自分をそだて上げる能力を持つたものが、学生であろうと、労働者であろうとそれはどちらでも良い」と述べている。これは「(1)確固とした繼承性を保つた指導者の組織がないなら、どんな革命運動も恒久的なものとはなりえない。(2)自然発生的斗争に引き入れられて、運動の土台を構成し、運動に参加してくる大衆が廣範になればなる程、こういう組織の必要はいよいよ緊要となり、またこの組織は、いよいよ恒久的なものでなければならぬ。(なぜなら、その時は、あらゆる種類のデマゴーグが、大衆の未熟な層をまどわすことが高いよい最容易になるからである)。(3)この組織は、職業的に革命的活動に従う人々から主として法りたなければならない。(4)專制国では、職業的に革命的活動に従い、政治警察と斗争する技術について、職業的訓練を受けた人々だけを參加させる様にして、この組織の成員を狭くすればする程、この組織を「とらえつく

すこと」は増々困難になり、(5)労働者階級の出身である

と、その他の社会階級の出身であるとを問わず運動に参加し、その中で、積極的に活動できる人々の範囲が増々広くなるであろう」と「ロシア社会主義運動の危機が、経済斗争、民主主義的政治斗争とプロレタリア革命運動プロレタリア独裁との二つの性格の異なる斗争の混同にある」と左辺に記載され、革命家の組織の建設、その組織性格を規定し、先のデマゴークに反駁する。それ故レーニンは、2つの政治斗争と組織性格の相違、すなわち、経済斗争のための労働者に精力と確固さと継承性を保証できる様な、革命家の組織をつくると買う任務」をまず提起した。かかる前衛党が来るべき革命にプロレタリアートの階級性を刻印し、プロレタリア独裁を保証すると考えたのである。

今日、我々は、レーニン党組織觀を全面的に継承している前衛党が来るべき革命にプロレタリアートの階級性をかねばならない。何故ならば、既にみてきた様に、それが、唯一革命的なマルクス、エンゲルスの党組織觀の継承であり、帝国主義的段階に於ける党組織の発展だからであり、又、日本共産主義運動が抱えている問題、矛盾、つまり、日本共産主義運動史の総括、就中、戦後革命運動の敗北、1958年以降の共産主義者同盟を軸とした連合赤軍問題として突出して現われ、我々自身が、党的に敗北し、今日に至っていることを考え場合、その路線から導びき出された組織路線、組織性格を根本から洗い出し、その克服をマルクス、レーニン主義から導びき出される正しい革命路線の獲得と、レーニン党組織觀に立脚する以外に解決の途がないからである。

そして、我々が直面している問題は、レーニン時代には直接的には問題にはされなかつたプロレタリア独裁と革命戦争の組織化といふ新たな質の獲得であり、これは、マルクス、エンゲルス、レーニンと継承された党組織觀の発展としてしか解決できないからである。つまり、中央集権主義で武装した取業革命家の組織が、同時に、軍事組織でなければならない事、革命戦争の中で解决していかねばならない。それは当然にして非合法党である。

### (3) 経済主義者との斗い

レーニンのこうした党組織觀「新しい型」の党建設は、主として第2インターナショナルの国際的見立主義的傾向とそのロシア的表現であるベ・クリチュフスキーやマルティノフ等の経済主義者との激しい理論斗争の中で貫徹した。経済主義者は、労働運動の自然発性に押さえ実践的には、ブルジョア民主主義派の尻押し部隊として機能し、理論的には、ブルジョアイデオロジーへの屈服、政治的には、組合主義政治の主張、組織的には、組合主義政治の主張、組織的には、革命家の労働運動への指導の否定、つまり、革命家の独自的役割の否定である。レーニンは、何故に、目的意識性の軽視、あるいは無視が、自然発生性の押さえに対する抗争とする右翼日和見主義として、もっと正確に言えば、ブルジョアジーの手代として結果すると言うのであろうか。レーニンは、1860年代からの労働運動が成し遂げた前進

を追いかながら、「『自然発生的要素』とは、本質上、意識性の萌芽に他ならない」と規定し、「それに、原始的な一揆にしても、すでに意識性のある程度の覚醒をあらわすものであった。つまり、労働者は、自分等を圧迫している制度が、確固不動のものであると言う、古くからの信仰を失なって、集団的反抗の必要を理解したはじめたとは言わないが……感じはじめ、奴隸的従順をきっぱりと捨て去ったのである。だが、それでもやはり、それは斗争の現われであるよりも、はるかに絶望と復讐心との現われであった。90年代のストライキは、これに較べて、はるかに多くの意識性の内めきを示している……」一揆が抑圧された人々の単なる蜂起でしかなかったのに対して、組織的なストライキは、すでに階級斗争の芽ばえをあらわしていた。だが、あくまでも芽ばえにすぎない。……それは、労働者と雇主との敵対の目ざめを表示するものであつたが、しかし労働者は、自分達の利害が今日の政治的・社会的体制全体と和解しない様に対立していると言ひ意識、すなわち、社会民主主義的意識を持つて、はるかに多くの意識性の内めきを示している」と分析している。つまり、レーニンは、「一揆」にくらべれば、非常な進歩であつたにも拘らず、やはり、純粹に、自然発生的な運動の範囲を出なかつたのである」と分析している。つまり、レーニンは、どんな原始的な一揆にしても、階級的意識性のある程度の覚醒があること。組織的なストライキに於いては、より多くの意識性の内めきがあること。それは、階級斗争の芽ばえをあらわしていること。しかし、芽ばえは、あくまで芽ばえであり花ではないこと、それ故、社会民主主義的意識に達するためには、単なる萌芽形態の量的拡大ではなく、質的飛躍が必要であると言うことである。我々は、かかる内容をマルクスとエンゲルスの資本主義批判を検討、分析する中で、「歴史の立証」ではなく、原理的に解明してきた。レーニンが、原始的一揆に、意識性のある程度の覚醒を認めることは、事実上、第2インターナショナルの全ての論客に打ち棄てられたマルクス、エンゲルスの資本主義批判が復活したことを意味する。これは「人民の友とは何か」「ロシアに於ける資本主義の発達」の中で、育くれたレーニン資本主義批判の中に、用意され、準備されたものであるが、1902年当時のレーニンは、このことを充分理解していなかつた故に、社会民主主義的意識の飛躍の必然を歴史主義的にしか説明しなかつた。レーニンの「労働者階級が、全く自分の力だけでは組合主義的意識、すなわち組合に団結し雇い主との斗争をおこない政府から労働者に必要なためこれの法律の発布を克ち取るなどのことが必要だ」という確信しか、つくり上げないことは、全ての國の歴史の立証するところである」と言う主張にそれは明確にあらわれている。経済主義者が、ブルジョアジーに全面降伏する根拠は、自然発性が、賃労働と資本、価値法則の中で、生まれて、そこへ返ってくる意識だからである。今日、経済主義（社会民主主義、現代修正主義）が共産主義運動上に大きな地位を占め、労働者運動の大半を分割し、ブルジョアジーに労働者を売り渡している。我々は、これらを解体、揚棄する任務が目前に控えている。その際、レーニンの経済主義批判を充てんに活用していかねばならない。

#### (1) (4) 革命党と外部注入論

その上、レーニンは「労働者は、社会民主主義的意識を持つてゐるはずもなかつた」と述べ、「この意識は、外部からしかるべきたらし得ないものだつた」と断言する。

それ故、経済主義者を「いやしくも、労働運動の自然発生性のまえに拝跪することは……労働者に対するブルジョア、イデオロギーの影響をつよめることを意味する」と激しく批判する。なぜなら「労働者大衆自身が彼らの運動の進展それ自体のあいだに、独自のイデオロギーを創りだすと言つては、問題は、こゝでしかありえない。」ブルジョア、イデオロギーがそれとも社会主義イデオロギーかと。そこには中間のものはない……」、そして、ブルジョア、イデオロギーが、社会主義イデオロギーより、その起源に於いて、古く、洗練されたブルレタリアートに口あたりの良いように仕上げられているが故に、「いやしくも、社会主義的イデオロギーを軽視すること、いやしくもそれから離反することを意味する」と強調する。レーニンが、かかる經濟主義者に対する批判の中から、導びきだした実践的結論は「革命的<sup>革命論</sup>として革命運動はありえない」と、先進的な理論にみちびかれた党だけが先進斗士の役割を果すことができるなどである。すなわち、「だから、我々の任務、すなわち、社会民主主義者の任務は、自然発生性と斗争すること、ブルジョアジーの庇護の下に入ろうとする組合主義のこの自然発生的な志向から、労働運動をそらし、革命的社會民主主義の庇護の下に引き入れることである」。ブルレタリアートをブルジョア階級である。ブルレタリアートは、革命党へ組織されて始めて、階級として行動できる。それ故に党と階級についていふと、この大原則から導びき出される結論は、党「の党組織觀と無縁である。我々は、党と別個な所で、労働者の階級一元論である。」これは「解党主義、反前衛主義、大衆運動主義、日和見主義である。そして、ブルレタリアートの普遍的利害を裏切り、ブルレタリアートをブルジョアジーに屈服させ革命を裏切るからである。

#### (5) 革命党と宣伝、煽動、暴露

高原智<sup>トモシ</sup>が言う様に、経済主義はテロリズムに對して相互に補完する關係にある。両者は共に大衆の革命的積極性を過少に評価し、大衆に信頼をよせていない。経済主義は、組合主義的政治に止まり、テロリズムは、テロルを政治的煽動に代用させ様とする。レーニンは、この誤った2つの傾向に対しても、労働者の政治的意識を発達させ、革命的積極性、英雄的精神を引きだすと共に、社会民主主義者が、直面している革命の一般民主主義的課題に応えるためにも、「住民のすべての階級の中に入つていかねばならない」と言う任務を提起する。そして「階級的政治的意識は、外部からしか、つまり、経済斗争の外部から、労働者と雇主の關係の圈外からしか労働者にもたらすことができない。この知識を汲み取ることのできる唯一の分野は、すべての階級および層と國家

および政府との關係、すべての階級の相互關係の分野である。だから労働者に政治的知識をもたらすために何をなすべきか、と言う間に對しては、経済主義に傾いている実践家はもちろんのこと、大多数の場合、実践を満足させている回答一つまり「労働者のところへ行け」という回答を与えるだけではだめなのである。労働者に政治的知識をもたらすためには、社会民主主義者は、住民の間のすべての階級の中に入つていかねばならない。自分の軍隊の諸部隊をあらゆる方面に派遣していくかねばならない」と主張する。そしてレーニンは、全面的な政治宣伝、煽動、暴露によつて獲ち取られる全面的な政治意識いいかえるならば、「経済斗争な労働者のうちに生みだした政治的意識の関きを利用して、労働者を社会民主主義的な政治意識に引き上げること」の具体的な内容を次のように言つてはいる。「もし、労働者が、専横と抑圧、暴力と濫用行為のありとあらゆる事例……に反応する習慣をしかも、ほかのどの見地からでもなく、まさに、社会民主主義的な現地から反応する習慣を得ていなければ、労働者階級の意識は真に政治的な意識ではあり得ない、もし労働者が、具体的な、しかも焦眉の切実な政治的事実や事件にもとづいて、他のそれぞれの社会階級の知識、精神的、政治生活のいっさいの現われを觀察することを学ばないなら、一また住民のすべての階級、層、集團の活動と生活の全ての側面の唯物論的分析と唯物論的評価を実現に應用することを学ばないなら、労働者大衆の意識は、真に階級的な意識でありえない。労働者階級の意識や觀察力や意識をもつぱらでもないまでも主として、この階級自身に向けさせる様な人は、社会民主主義者ではない。なぜなら、労働者階級の自己認識は、現代社会の全ての階級の相互關係についての完全に明瞭な理解、一單に理論的な理解だけではなく、さらに……理論的な理解よりもむしろ、と言つた方が正しくさえもある。だからこそ、経済斗争が、大衆を政治運動にひき入れるためにもっとも広範に適用されるべき手段であるといふのが経済主義者の説教は、その実践意義からすれば、それは実は、はなはだしく有害であり、また実にはなはだしく反動的なのである。社会民主主義者となるためには、労働者は、地主や坊主、商官や農民、学生や浮浪人の經濟的本性と社会的・政治的特性を明瞭に理解し、彼らの強味と弱点とを知り、それぞれの階級や、それぞれの層が自分の利己的な意向や本当の「はら」をつづみかくすのに使つてはいる流行文句や、ありとあらゆる詭弁をみぬくことができ、どういう制度、機関や法律があれこれの利害を反映しているのか、しかも正に、どの様に反映しているのかを見抜くことができなければならない。「社会民主主義者の理想は……ありとあらゆる専横と压制の歴史的意義を万人に説明できる人民の護民官でなければならぬ」ということは、どんなに力説しても、力説した



なによりも必要なことは、「この活動舞台をひろげ、規則的な共同活動にもとづいていろいろの都市のあいだに実際上の結びつきをつくりだすことである」と言って次の様に主張する。「私は主張する。このような実際上の結びつきをつくりだす仕事は、共通の新聞にもとづいてはじめて開始することができますが、その活動の成果を総合し、それに沿ってすべての道ローマ規則的な全国的事業であるからである」と。レーニンは全国政治新聞の「計画」を提起し、中央機関紙局の独自的組織化を計った。その際に、レーニンは、全国政治新聞、中央機関紙局と中央委員会とは、如何なる同一性と差異とに於いて考えたのであろうか。レーニンは「同志に与える手紙」の中で、次の様に答えていた。「新聞は、党の思想的指導者となつて、理論的真理、戦術問題、組織上的一般思想あれこれの時機に於ける全党的一般的任務を発展させることができると、また発展させなければならない。……運動の実際上の指導者となり得るのは特別な中央グループ（これを中央委員会とでも名づけよう）だけあって、これはすべての委員会と直接の連絡を持ち全ロシアの社会民主主義者の最も革命的勢力の全部を含むし、たとえば、文献の配布、リーフレットの發行、勢力の配分、特別な業務を管掌する人物やグループの任命、全国デモンストレーションや峰起の準備等々の様な、いわゆる全党的な仕事を指揮するものである。嚴重な秘密活動を行い、運動の継承性をたもつ必要があるため、わが党には、2つの指導的中心、中央機関紙と中央委員会があつてもよいし、またなければならない」と。つまりレーニンは、中央機関紙局には、思想的指導という機能が属すること。中央機関紙局には、思想的指導を行ふと、同一性と差異性とを明らかにして構成されると言つて、同一性と差異性とを明らかにしている。これは、明らかに中央集権主義の否定である。では何故「2つの指導的中心」機関を設置する必要があったのか。この設問に対し、レーニンは「一歩前進、二歩後退」の中で次の様に回答している。「『イスクラ』が党組織化の基礎におこると努した基本的思想は、本質的には、次の二点に帰着する。第一の中央集権主義の思想は、組織上の頭の部分、細部的な問題全体の解決方法を原則的に規定するものであった。第二の思想、思想上の指導機関である新聞の特殊役割」は、革命的突撃の最初の作戦基地を国外につくるという条件で、政治的奴隸制の環境のもとにあるほかならぬロシアの社会民主主義運動の一時的な必要を考慮したものであった。

ただ一つの原則的な思想である第一の思想は、規約全体をつらぬかねばならなかつた。場所と行動方法との一時的な事情のうみだす部分的な思想である第2の思想は、中央集権主義からの外見的な逸脱に、すなわち、中央機関紙と中央委員会という二つの中央機関をつくる点に表現されていた」と。つまりレーニンは、党組織化の根本思想として中央集権主義と全国政治新聞をあげ、前者を「ただ一つの原則的な思想」であると規定し、后者を「中央集権主義からの外見的な逸脱」として、ロシアの政治環境の特殊性から生まれる不可避な「逸脱」であると、

いっているのである。今日の我々は、二つの困難を、ロシアの特殊事情とは違つて、統一的に推進していかねばならない。つまり、中央の下に二つの指導を統合し、政治的、理論的、組織的指導を集中しなければならない。更に、日本共産主義運動の総括、就中、この間の我々の路線的、組織的敗北の総括から、中央は、軍事組織でなければならぬ。今日の日本階級斗争を領導し、革命戦争を組織する我々は、党中央に軍事的指導と言う新たな機能を加え、中央委員会を組織しなければならない。中央委員会に4つの機能を集中させることにより、始めて、革命戦争を計画し、組織し、練り上げる、現代革命の核心的事業を遂行し得る。そして、この党は、当然に連合して、非合法党であり、権限の集中と任務の分散化、集中と分業の中で党の秘密活動を遂行し、全ゆる活動を秘密裏に貫徹し、非合法党の体系的組織化を計つていかねばならないのであり、全ゆる専門的グループの体系的秘密活動を地下で創出していくかねばならない。

### 第三章 スターリン党組織観批判

旧同盟は、レーニン主義の立場を掲げ七〇年安保大会に戦に立ち上り、その革命翼として日本共産主義運動の索引者としての役割を果したが、その思想的、政治的脆弱性を完全に克服できず、敗北を刻印された。我々が連合連赤敗北を通して学び取らねばならないものは、そして事あるごとに強調してきたことは、強固な思想、政治路線に貫徹された单一の革命党を創建しなければならないことである。革命組織の思想、政治路線が如何に、不動のマルクス、レーニン主義に立脚してゐるかを見極める事では、その革命組織の党組織路線が網領、総路線に裏打ちされ実態的に組織されているか、である。レーニン主義党組織論の発展、止揚の名の下に組織された旧同盟の組織路線は、実はスターリンの（ボルシェビキ化運動）→コミンテルン→日本「共産党」に引き継れていたスターリン党組織論を突破していかなかった。それ故に、我々は、スターリン党組織觀批判をここに取り上げ我々の党組織觀の革命的揚棄を斗い取る一助としていかねばならない。

- (1) 「レーニン主義の基礎」（スターリン）の政治目的  
「レーニン主義の基礎」の政治目的は、（一）党(5)(6)の中に端的にみることができる。「（）分派の存在と両立しない意志の統一体としての党」「（）党は口和見主義をとりのぞくことによつて強固になる」という主張は、ロシア共産党十三回大会を目前にしてスターリン、ジュノビエフ、カメールネフのトロイカが左翼反対派（トロツキ派）との党内斗争に決着付けるために主張された。更にスターリンは、「基礎」の中でレーニン主義が「ロシアの特殊な条件だけでマルクス主義を適用」したものではなく、「レーニンは国際的發展全体に根をもつてゐる國際的現象であつて、單にロシア的現象ではなく……」一般的にはプロレタリア革命の理論と戦術であるとレーニンは、プロレタリア独裁の理論と戦術であるとレーニン主義、実は、スターリンの主張を規定する、単にロシア国

内に止まらず国外に於て、コミニナルンの中で隠然たる影響力を持つていたローザ派との決着をも目的にしていた。トロイカの党内一党派斗争の決着づけの手口は、二つの前提的基準を打ち立てることから始まる。第一は、「分派の存在は、党的統一と党的鐵の規律とも両立しない」ということであり、第二は、「小ブルジョア的グループは、何らかの形で党内に入り込み、そこに動搖と日和見主義の精神を持ち込み、彼等は、主として分派活動と分裂の源であり、内部から党を解体させ、分裂・爆破しようとする企ての源である」と言うことである。ここから左翼反対派は、分派を創り党を混乱させ分裂活動をしている。これは第二の基準のあらわれであり、かかる分子を「党から無条件に即自余名」すべきであると結論づける。我々も分派の存在を認めない。なぜなら分派の存在の揚棄こそ第二次ブント以来の組織的課題であり、それは綱領一組織一政治の三位一体的党建設によつて始めて揚棄されること。そして現実に我々はこの様な党建設をすすめているからであつて、決して官僚主義的な「党的統一」と「党的鐵の規律」と言つた観点からのそれではない。

## (2) 党と革命

スター・リンは、「党は何よりもまず、労働者階級の前衛でなければならない。……だが真に前衛部隊になるためには、党は革命的理論で運動の法則についての知識で革命の法則についての知識で武装しなければならない」(同)と主張する。これはスター・リンが生産力と生産関係の矛盾をプロレタリアートとブルジョアジーとの階級対立の非和解性として把握しきれなかつた結果、現実の資本主義生産様式が生みだすプロレタリア独裁と共産主義革命の物質的根拠を説き明かすことができず内容のない法則に全ての問題を流し、党を「運動の法則」や「革命の法則」の認識者にしてあげ、革命的実践の立場を否定する反動的見解である。ここでは「共産主義者の理論的諸命題は、現にある階級斗争の事実関係、すなわちわれわれの目の前でおこっている歴史的運動の一般的表現に他ならない」という観点が完全に忘れられており、レーニンが「何をなすべきか」で強調した自然性と目的意識性の問題の意義が矮少化されており、革命の問題を「革命の法則」へすりかえ、党を認識者集団へと転落させている。スター・リンは、又「党は労働者階級の先頭に立ちねばならないし、また労働者階級よりも遠くをみなければならぬ」と言つてゐる。これは党が法則の認識者集団にならねばならないといふことであり、逆に言えば、党は絶対不可侵・無謬の社会集団といふことになるプロレタリアートの経済的地位とかかる地位が不可避に生みだす階級斗争を資本制生産様式の中に基礎づけることが出来ない。スター・リン党組織觀に立脚している限り、「労働者階級を労働組合主義の道からひきはなす」ことは絶対に不可能である。

## (3) 党と中央集権主義

スター・リンは「党が眞に労働者階級の斗争を指導したければ、党は同時にその階級の組織された部隊でなければならぬ」「党が組織された全体だと言う思想は、わが党の規約第一条についてのレーニンの有名な定式の中で確認されている。そこでは党は諸組織の総和とみな

れ、党員は党組織の一つの一員とみられている」「だが党は党組織の単なる総和ではない。党は同時にこれらの組織の單一の体系であり、これらの組織が單一の全体に正式に統合されたものであつて上下の指導機關を持ち、少数は多数に従い実践上の諸決定は全党員の義務となる」と、これは「基礎」に於て、唯一組織原則を言つてゐる箇所であるが、中央集権主義については全く触れられていない。レーニンがあれ程強調した内容をスター・リンは事実上捨て去つてゐる。そして党の組織性格についても「総和」「体系」ということをあれこれ言うだけで、職業革命家を中心にすると言う肝心な点を捨て去つてゐる。レーニンは「革命家の組織は、まず第一に、また主として、革命的活動を職業とする人々を含まねばならない」「この組織は、職業的に革命的活動に従う人々から主としてないたをなければならない」と言つたが、スター・リンが、レーニン主義を「プロレタリア革命の理論と戦術」と主張する際、レーニン党の組織性格、組織原則、統じてレーニン党組織觀の正體がそこからはずされている。つまり、スター・リンはレーニン党組織性格である職業革命家を中心とする組織といふ観点を否定し、中央集権主義も否定し、レーニン党の精髄を抜き去つたのである。

## (4) 革命党とプロレタリア独裁

スター・リンは「党は独裁がまだ獲得されていない場合には、独裁を獲得するために、また独裁がすでに獲得されている場合は、独裁を強固にし、広げるためにプロレタリアートの手に握られた道具である」「党がプロレタリアートに必要なのは、独裁を獲得し維持するためである。党はプロレタリア独裁の道具である」とプロレタリアートを目的化し、党はそのための道具だと言つてゐる。この見解は完全にマルクス、エンゲルス、レーニンの修正である。我々は「ゴータ綱領批判」の中で明らかにした様に、マルクス、エンゲルスにとって、又レーニンにとつてプロレタリア革命党の目的は「労働者階級の經濟的解放」であり、プロレタリア独裁は、そのための「偉大な義務」にすぎないとを繰り返し主張している。この見解は完全にマルクス、エンゲルス、レーニンの修復である。レーニンは「ブルジョアジーの反抗は、彼等が打倒される(例え、一国的であれ)ことによつて十倍にもなるし、また共産主義と無政府主義の相違を明確にしてきた。レーニンは「ブルジョアジーの反抗は、彼等が打倒されると、その力は、國際資本の力、ブルジョアジーの國際的連撃の力と強固さにあるばかりでなく、習慣の力、小規模生産の力もある。なぜなら、小規模生産は殘念ながらまだ、この世におびただしく残つていて、この小規模生産が資本主義とブルジョアジーをたえず、毎日毎時間、自然発生的に大規模に生みだしている」とを指摘し、この小規模生産に基礎をおく、資本主義とブルジョアジーとの斗争の必要性を説き、プロレタリア革命の共産主義を提起している。スター・リンのこの誤りは、彼の資本主義批判の一面性に原因する。彼は「基礎」の(四)プロレタリア独裁の中で、「ソビエト権力の特徴はどこにあるのか」と自問し、「ソビエト権力が階級が存在するという条件下で可能な全ての國家組織のうちで、最も大衆的で、最も民主主義的な国家組織である」という点にある。なぜなら、ソビエト権力は搾取者に対する斗争で労働者と搾取されている農民とが結合し、協力する舞台であり、そ

リア革命党の大目的は否定され、共産主義の政治は、民主主義的政治にのみまれ、解体され、第二インター・ショナルの党に革命党を売り渡す反動的な代物である。つまり党の基礎＝工場細胞という組織では決して、プロレタリア独裁を準備することはできない。一九三〇年代の革命と反革命をめぐる攻防戦に於て、ドイツ共産党フランス共産党、イタリア赤色同盟の一擧的壊滅、ファシズムへの敗北の組織的根拠は、ここにあり、実は、一九二四年以来反革命に敗北の道をあゆんできた結果だつたのであり、「工場細胞＝党的基礎」に基く軍事組織は、受動的、防禦的、自衛的な水準を超えることが出来ず、プロレタリア独裁＝共産主義革命の組織として鍛え上げられることはなく、武装蜂起の瞬間に、工場から出撃できず、何の役にも立たない。旧同盟の組織は、スターリン主義党に軍事機能を接ぎ木したものであり、党が軍事を組織、指導できず、不斷に党が軍に解消され、逆に「軍の中の党」と組織路線を納化していく。それ故にこそ、我々はスターリン組織観を克服し、マルクス、エンゲルス、レーニンの党組織觀を継承、発展させねばならない。我々の血のにじむ実践的教訓をしっかりと握りしめ、確固たるマルクス、レーニン主義の党を創建し、いくことこそ、プロレタリア独裁勝利の第一歩である。武装して、非合法の党を創建せよ！

卷之三

左側 2 行 田

「我」是「我」，「他」是「他」。工廠的工頭說：「我」是「我」，「他」是「他」。

セラミック・マニエ・レーニュ美術館

デマも含めて並べたてているものであつた（味方陣営内部の問題を敵権力（地裁）に上申するやり方はタレコミである）、以上のことから、塙見の基本路線は、われわれの批判から逃げるためには「先は『分離反対』といいつゝも、よど号田・丁公判からの

支援委をはじめ、救援戦線の諸君へ

H・J 分半三 手を支持

「司法の反動化」が「新治安立法」を射程に入れた弾圧として農判します。被告団内部の論争を「人民内部の矛盾を処理する」原則に従つて解決できず、ブルシヌア階級独裁権力「地裁の介入をまねき、壇上の職権分離と云う事態を引き起し、しかも、これに対しても被告全員が團結して対決しえず、被告団の分裂、よど号日・J公判の分裂と云う結果になつたことを自己批判します。

いかかつてゐる時に團結し、統一してこれと闘うことは、われわれの最低限の義務であるのに、味方戦線の混乱を招いたのは重大な誤りであり、これを自己批判し、今後のよど号日・丁公判の中で統一告白団と編集委は全力をあげて一步後退を挽回し、よど号日・丁公判を戦闘的、革命的に闘い、よど号日・丁闘争の革命的成果を防衛し継承し教訓を発展させ、日朝人民の國際主義的團結の形成に貢献し、もつて共謀共同正犯攻撃を完全に粉碎していく決意である。

上で公判を再開した、今日の分離問題の本質は、第一に塩見がよど号H・J公判から分離、大菩薩破防法公判への併合、検事側申請にての公判で被告を個々に分断し、審理のスピードアップを図り、弾圧を強めている地裁（檢事）が、よど号H・J公判闘争で追い結められた現状を逆転するために、塩見の統一公判からの分離を認めたことに本質がある。塩見と地裁（檢事）の利害は一致しているのである。従つて統一被告團の基本的な態度は以下である。第一に地裁に対しては、塩見を分離する決定を糾弾しそれを撤回し、塩見を統一公判に戻すことを要求し、塩見に対しては、H・J公判からの分離、破防法公判への併合と云う策動を弾劾し、それを中止することを要求した。（公判闘争破壊への自己批判要求もあるが）。第二に塩見が分離策動を中止し、統一公判で闘う意志があるかぎり、塩見を分離した公判進行には応じない。統一被告團はこれを十月十六日までの公判への出廷拒否として示した。第三に、塩見が分離策動を中止せず、統一公判に戻る意志がないのであれば、やむを得ないので塩見抜きの統一公判として、公判を進めていくと云うものであつた。八月二十二日の地裁の分離決定以後、統一被告團は権力の不当介入阻止、分離攻撃粉碎を十月十六日の公判への出廷拒否として闘いつつ、塩見に対して再三にわたつて統一公判へ復帰する意志があるので裁判正かと質問した。それへの塩見の返答は罵詈雑言とサマ宣传だけである。統一公判の貫徹を要求するのではなく、分離を前提にしていて、対してば「私が分離するか否かは私自身に決定権があるので裁判正がトヤカクくちばしを差しはさむものではありません」と申し入る所である。さらに塩見は八月二十二日以後も大菩薩公判への併合策動を止めておらず、地裁に再三にわたつて併合の促進を要求している。塩見の脱落は十二月二日公判の際に塩見が地裁に提出した「声明」によつて明らかである。それは分離反対日統一公判への復帰を主張するのでではなく、第一に塩見の審理が遅延していることを嘆き、實理の促進つまり分離し破防法公判への併合手続きの促進を要求してゐた。しかも統一公判への復帰の意志表示ではなく「新清派」（われわれのことらしい）批判と称して、被告團内部の意見の対立

アマも含めて並べてているものであつた（味方陣営内部の問題を敵権力（地裁）に上申するやり方はタレコミである）、以上のことから、塙見の基本路線は、われわれの批判から逃げるため、分離・破防法公判への併合であることが明白となつた。

次に第一被告団は、地裁一検察一体となつた分離策動、逆転攻撃に対しては、川島氏に対する保釈取り消しのどう喝をはねのけて十二月十六日の公判への三被告の出廷拒否で反撃してきた。

当事者は分離問題を利用して川島氏の保釈取り消しを公言している。また、完全に追い詰められないかにしても拒否できない上原氏が保釈を分離問題を利用して引き延ばすという逆転策動に出てきた。統一被告団は保釈問題を重視し、ここで反撃することを上原によると、塙見は分離問題を利用した逆転攻撃で、高原氏、さらには塙見の保釈獲得のために必要であると考へて十二月二日の公判闘争で反撃を開始した。

統一被告団はこれまでの公判闘争の成果を守り、地裁一検察の逆転策動を粉碎し、川島氏への保釈取り消しを許さず、上原氏の保釈を獲得するため、十二月二日の公判から公判闘争を開じた。

統一被告団の方針は、地裁一検察の分離問題を利用した逆転策動と弾圧を阻止し、日・J公判闘争の成果を防衛し、隊伍を整えて反撃していくものでわれわれは断固支持する。

塙見一派は統一被告団が地裁と癒着しているとか、偏向したそれを統一公判を維持する為の前提条件である。塙見は二月の公判で未遂に終つたとはいえ、証人発言をメモしていた上原氏に被告席で突然殴りかかるといふ行為が連赤問題と上原氏の対立が連合赤軍によるのはけしからんと云つてゐる。塙見がこれを認めるとは引き起した。このことが分離問題の発端である。われわれは二つの点でこの事態を重視した。第一は塙見と上原氏の対立が連合赤軍の第一のとして沿んど唯一のものは、「公判闘争に内ゲバを持ち込むのを止めよ」ということである。塙見がこれを認めることは統一公判を維持する為の前提条件である。塙見は二月の公判で未遂に終つたとはいえ、証人発言をメモしていた上原氏に被告席で突然殴りかかるといふ行為が連赤問題とともに云える前代未聞の不祥事を引いたのである。連赤問題の多くの教訓の一つに「人民内部の矛盾の權力の介在しないところであれば論争の上のケンカをもって笑つては自制しつつ、再三にわたつて、法廷という警戒な条件下である」と、權力の介入を説いていたとおりの地裁の介入、被告団の分断・職種分離を誘ふ組織的に裁判所内での襲撃を仕掛け、われわれや統一被告団が譲歩を裁判所内で待ち伏せ再三にわたりつて襲撃を試みてきた。その譲歩をとらないよう約束せよと要求した。ところが塙見は言を左右してこれを拒否し以後の公判で塙見一派は保釈中の川島氏の出廷を拒み、防法弁護団を襲撃した行為と同じである。いやむしろ、敵権力の内庭たる法廷で行なわれた点で、いつそう悪質である。統一被告団は自製しつつ、再三にわたつて、法廷という警戒な条件下であることを、權力の介入を説いていたとおりの地裁の介入、被告団の分断・職種分離を誘ふ組織的に裁判所内での襲撃を仕掛け、われわれや統一被告団が譲歩を試みてきたのである。われわれは塙見一派の行動が一貫してしまつたのである。われわれは塙見一派の行動が一貫してしまつたのである。

ブルジョア階級独裁を利用するものであり、又敵権力を利用したものであることを糾弾する。塙見は分離・破防法への併合のために地裁を利用し、また塙見一派の裁判所内での川島氏への待ち伏せ襲撃は、保釈取り消しを公言している地裁（検事）の策動と合致するものである。塙見一派の一連の利敵行為に対しても統一被告團が自己批判を要求し塙見に対する統一公判を維持するためには「公判闘争に内ゲバを持ち込むな」と要求するのは当然である。

塙見は自分が分離されたことから自分が弾圧されているかの如く騒ぎ立てているが、ブルジョア階級独裁の弾圧にさらされているのは被告全員であり、統一被告團は、塙見が破壊した統一公判を維持し、塙見が誘い込んだ敵権力の介入を阻止して、地裁・検察との闘いに直面している統一被告團が公判闘争全体の利益のために、塙見を除いて独自の闘いとして公判闘争を闘つていくことは正しい選択でありわれわれは断固支持する。

よど号H・J公判に対する統一被告團の方針の第一は共謀攻撃粉碎である。

統一被告團は「党組織を第一」とし、党員個人の利益に従属する」と云う原則を確立し、「よど号H・J闘争が赤軍派の闘争であることを公然と認めると共に」「検事がよど号H・Jに関する被告の共謀を全然立証していないことを暴露し共謀のデツチ上げを粉碎してきた」（声明）と云つてゐる。

ところが塙見は、これを「『赤軍派が（塙見と読め）やつたと認めよ』と権力にガサネタをタレ込もうとする」と批判している。ここには党員個人の利益を第一とし、党組織の利益を党員個人の利益に従属させる個人主義はプロレタリア階級の党への組織化ではなく個々人の主観的決意を革命の原動力とするからこうなるのである。塙見はよど号H・Jは赤軍派の闘争ではないと主張するのか？ではいつたい誰の闘争だというのか？田宮同志たちが赤軍派の組織とは別に勝手にやつた闘争だと云うのか？これが「田宮独走説」である。塙見は最近「田宮独走説」など主張したことがないといふ。あろうことか「田宮独走説」は高原氏の主張だとスリカエをやつてゐる。ところが、その舌の根もかわかない内に「よど号H・Jを赤軍派の闘争だと認めるのはけしからん」といつてゐる。つまり塙見はよど号H・Jは赤軍派の闘争ではなく田宮同志たちが赤軍派と関係なく個人的に勝手にやつたのであり、従つて議長であつた塙見は全く闘知しないことであり無罪だと主張しているのである。なんという破廉恥漢か、組織を解体し同志を売り渡すことで助命を嘆願しているのである。統一被告團はこのよど号H・Jの主張を「田宮独走説」として批判してきたのである、成果は一人占（他）、犠牲は下部へという家父長主義の塙見は自分が向を批判されているのかも分つてないらしい。（なを塙見は「田宮独走説」を主張した文章があるなら出せといつてゐる。文章はある。しかし公開はしない。）

被告間の内部討論の資料ゆえ原則として公開しない。塙見が特に望むなら公開も考慮するが、その必要もないと考えてゐる。）敵権力は、革命党への反革命弾圧のため、党の闘つた闘争について直接参加していない党員やシンパを共謀共同正犯へデツチ上げ逮捕、起訴、投獄する、この時逮捕された党員がそれぞれに党のやつた闘争ではない党員の誰れかが党とは別に勝手にやつた闘争だと主張した場合、革命党を建設し革命に勝利できるだらうか！できる訳がない、特に革命期には党員の直接闘争しない闘争は激發するのだ。塙見のように党の闘いを防衛し同志を売り渡して助命を嘆願するような組織は解体し個々人に分解する。よど号H・J公判での共謀デツチ上げ攻撃紛糾の闘いはブルジョア民主主義に基づく闘争であり、その限界を理解せずそれを無制限に拡大すればプロレタリア階級独裁の集中的表現であるマルクス・レーニン主義党を解体するのである。もう一つ個人主義の塙見的現われとして、党組織の私物

化があるので赤軍派の闘争と認めるることは、塙見がやつたと認めようには塙見は思えるのである。統一「被告」團はよど号H・J闘争を赤軍派の闘争と公然と認め防衛する。その上で「党員H・J共謀」という検察側の共謀共同正犯攻撃を粉碎する。この闘いはこれまでの公判闘争で既になかば勝利している、今后は完璧に粉碎しつくすことである。

統一「被告」團の第二の方針は日米「韓」侵略反革命軍事体制を暴露し、これと闘つていくことである。

統一「被告」團は「よど号H・Jに際して日本帝国主義は朝鮮民主主義人民共和国の権威が上つて、朴政権を手先とする南朝鮮での植民地支配が危機に陥ることを恐れ、日米「韓」軍事体制を動かし人命を無視して、よど号を3日間もの長時間にわたつて金浦空港に釘付けにしたのであることを徹底して暴露する」（声明）としている。

ところが、塙見はこれを「日『韓』米反革命体制の革命的暴露」に「必死で口をつぐんでこのことを語はうとしない」と批判している、これはデマである。統一「被告」團はよど号H・J闘争の革命的成果として日米「韓」侵略反革命軍事体制の暴露を支持し、防衛し、これをテコに公判闘争でいつそう発展させている。

しかし、よど号H・Jは最初から日米「韓」体制の暴露を目的として闘われたのではない、これはよど号H・Jの貫徹の結果として闘われたのではない、これはよど号H・Jの貫徹の結果としての革命的成果なのである。よど号H・Jは当初は「国際根拠地建設」を目的として、つまり現在の日本では蜂起のための軍隊

を建設できないので、社会主義国で革命軍を建設し訓練を受けて帰還させ、蜂起を実行するという目的で闘われたのである。この問題の総括としてよど号H・Jは日本で軍事組織・武装組織を建設すべきであり、日本人民に依拠して闘えばそれが十分に可能であるのに「國際根拠地論」でそれを放棄したのは安易な国外脱出であり、自力更生で日本人民に依拠するのではなく社会主義国その他民族に依存した点で誤つてゐたと考えてゐる。

マルクス・レーニン主義の觀点・立場からすれば、日帝打倒の社会主義革命の原動力は日本プロレタリア階級の階級闘争である。プロレタリア階級をマルクス・レーニン主義党へ組織し、この党をプロレタリア階級独裁の樹立のための武装して闘う非合法党として建設し、この周辺に多種多様の形態で大衆を結集させなければならぬのである、現在の日本においても、こうすれば軍事組織・武装組織を建設できる。ところが当時の赤軍派は根本的な次元では急進民主主義であり、日帝打倒の社会主義革命の原動力をためて軍事問題、武装闘争の中で挫折し、大菩薩の敗北をもたらした・この時点で赤軍派はプロレタリア階級のインテリゲンシヤである学生の資本主義に対する憤激を代表するものであつた。この

力を信頼せず、日本における軍事組織・武装組織の建設の放棄であり、国外逃亡であつたといわねばならない。また被抑圧民族たる朝鮮人民に対する利用主義であつた。この資本主義に対する急進民主主義的憤激と社会主義革命に対する觀念的決意主義は、連合赤軍においては、いわゆる「共産主義化」「総括」としてマクス・レーニン主義の觀点・立場に立つてゐた同志たちを肅清したのである。だから急進民主主義の誤りを自己批判し、清算し、教訓を繼承してプロレタリア階級を組織し、武装して闘う非合法のマルクス・レーニン主義党を建設し、その指導の下に多種多様の形態で大衆を結集する道を進まねばならないのである。これが我々の立場であり、われわれはこの立場から統一「被告」を支持

する。

塙見は「七〇年前蜂の追求とこれえの帰還を目的にし、またよど号闘争そのものを七〇年前段階蜂起の出発点としていた」ので「国外逃亡主義ではない」が、しかし「コスモボリタニズム＝他民族利用主義」であつたといつて、「ごまかしはいけない、帰還を目標にしていようがいまいが、眼目は日本での軍事組織、武装組織の建設を可能としていたか、不可能としていたかである、不可能とし他國で建設しようとしていたのである。これは日本のプロレタリア階級の革命的能力に対する不信であり、国外逃亡があつたとして自己批判しなければならない。この自己批判を認めてもよど号日・J闘争の革命的成果をいささかも清算するものではなく、教訓として繼承するものである、塙見はこのよど号日・J闘争の偉大な教訓を清算しているのである。塙見はコスモボリタニズムが他民族の人民と革命に対しては利用主義だたと認めているが、では日本人民に対してはどうなのかよく考えて答えてみよ。

塙見は「田宮同志は他民族利用主義＝コスモボリタニズムを自己批判したが、よど号日・J闘争を国外逃亡とは考えていない」と言つて、「金日成首相同志への手紙」として明らかにされた田宮同志たちの総括である。われわれの総括と一致しているか、それとも塙見の総括と一致しているか、一目で判るであろう。

「我々は、日本人民のため、日本革命のため、全てを捧げ尽すという態度をもつておらず、また日本の労働者人民の苦しみがどううものであり、彼らと結びついてどう闘うかがよく解つておらず、それ故に世界的に結びついた、帝国主義の反革命に抗して一国だけでプロレタリア独裁を樹立することが不可能に思えていたのです。革命的な御指導により、我々は人民の解放はその国の人民自身の力によつてのみなし遂げられるという主体思想をより深い内容で理解することができるようになりました」「我々は今ようやく自らの極左日和見主義、無政府主義を総括し、主体思想を基礎として、日本革命へ向け闘いを開始しつつある段階にあります」。

われわれは田宮同志たちの総括を真剣に受けとめ、主体的に把え返し、小ブル急進民主主義の誤りを自己批判し清算し、教訓を發展させ、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命路線を確立し、日本プロレタリア階級に依拠し混然一体となつて闘う中からマルクス・レーニン主義党を建設する闘いで呼応し、連帶しようとしている。これに対決する道は唯ひとつ、急進民主主義の誤りを自己批判し清算し教訓を發展させ、マルクス・レーニン主義によって他ならぬこの日本において、プロレタリア階級を組織し、他ならぬこの日本において武装して闘う非合法党を建設することだと考へている。これが、權力の國外逃亡論と対決する問題を持ち出しているが、われわれは、權力の國外逃亡論は「日本は軍事組織、武装組織を建設できないのだぞ！」というブルジョア階級のどう慢なうそふきだと考へている。これに對決する道は唯ひとつ、急進民主主義の誤りを自己批判し清算し教訓を發展させ、マルクス・レーニン主義によって他ならぬこの日本において、プロレタリア階級を組織し、他ならぬこの日本において武装して闘う非合法党を建設することだと考へている。よど号日・J公判は法廷闘争至上主義ではなくよど号日・J闘争の成果と教訓を現実に適合させ、日本における武装して闘う非合法党建設の誤りの中から教訓を引き出し、それを克服し新しい正しい路線へと発展させることが大切である。統一「被告」団は前者も後者もともに權力を握り、權力をも重視しているのである。

塙見は權力の國外逃亡論と対決する問題を持ち出しているが、われわれは、權力の國外逃亡論は「日本は軍事組織、武装組織を建設できないのだぞ！」というブルジョア階級のどう慢なうそふきだと考へている。これに對決する道は唯ひとつ、急進民主主義の誤りを自己批判し清算し教訓を發展させ、マルクス・レーニン主義によって他ならぬこの日本において、プロレタリア階級を組織し、他ならぬこの日本において武装して闘う非合法党を建設することだと考へている。よど号日・J公判は法廷闘争至上主義ではなくよど号日・J闘争の成果と教訓を現実に適合させ、日本における武装して闘う非合法党建設の誤りの中から教訓を引き出し、それを克服し新しい正しい路線へと発展させることが大切である。統一「被告」団は前者も後者もともに權力を握り、權力をも重視しているのである。

統一「被告」団の第三方針は保釈を充ちることである。

統一「被告」団は公判闘争を「堅持しあくまでも長期不当拘留を批判し、あくまでも長期不当拘留問題を基軸に保釈を要求して闘つてきた」（声明）としている。ところが保釈問題について塙見は、「我々は裁判闘争を重視するが、何よりも党建設を重視し、權力に利用されることも覚悟して必要ある場合は裁判の進行を早めることを主張し、超長期拘留攻撃と対決する一戦術にしようとする」と云

つてゐる、簡単な問題から片付けよう、統一「被告」団は、塙見が今春破防法公判でいつたん保釈許可が、出た途端によど号日・J公判の進行を早め「月に二、三回の公判でやろう」とか、最も重要な石田機長への反対尋問を「簡単にすませよう」とか、乗客証人は検面調書に同意しようとかいい出したのに反対し、これを阻止した、（このあと塙見は分離を決断したらしいが）。確かに保釈問題は重要である、特に「未決長期拘留が現下の反革命弾圧の最重要環一活動家の予防拘禁であることを踏まえ」（十二月六日「未決長期拘留紛糾討論」集会、基調報告）るならば超長期拘留を突破して保釈を充ちることは重要な任務となつてゐる、しかし同時にわれわれは「司法の反動化」が他方で、審理のスピードアップ早期実刑判決の強圧とし連赤百回指定や「東アジア反日武装戦線」の諸君への分断、早期判決の強要として襲いかかつてゐることを見落してはならない。よど号公判でも地裁は何度も月に二回の開廷を強行しようとしたが、その都度反撃し阻止してきた、塙見は自分の保釈しか考へないのでブルジョア階級独裁の弾圧の全体系が見えず、あろうことか審理のスピードアップと公判闘争の本質で保釈を嘆願しようとしているのである。この問題だけを見ても塙見のよど号日・J公判からの分離、破防法への併合の目的がどこにあつたのか明白である。統一「被告」団は、そうした塙見の態度を「塙見は保釈獲得のためと称してその見込みも立てないで公判闘争を速め、裁判闘争を放棄してきた」（声明）と批判している、保釈獲得闘争は裁判所に迎合するのではなく「司法の反動化」の全体系と闘い、法廷闘争と大衆闘争を結合させ、裁判所一検察を追いつめて闘いとらなければならぬ。上原氏の保釈闘争は長期間にわたつて非妥協的に粘り強く闘われてきたし、現に闘われてゐる。しかし、ここにはもつと重要な問題が存在している。獄中にある党員の保釈と党建設の関係である。塙見一派は現在、名実ともに獄中の塙見を最高指導者とし、ここに權力を集中している。（だから、全ゆる情報は檢閲を通過することになりタレコミになる）、それだけでなく塙見は「自分の保釈こそが党建設だ」として（塙見一派の諸君はこの程度にしか信用されていないとはいひやうの皮である）、ブルジョア民主主義的権利と基礎づく塙見の保釈に党建設を従属させていふ。これは、これは塙見一派の党員の保釈との関係という問題に対してもこの程度にしか信用されてゐないとはいひやうの皮である。これは塙見が高原氏を「早期保釈路線に一貫して反対し『裁判進行を早めるのは權力の思うツボだ』とか云つて、この問題だけはやたらは現れ、名実ともに獄中の塙見を最高指導者とし、ここに權力を持ち出してきた」と批判し、「更生出獄路線」だとデマつてゐることとも関係する。

高原氏は武装して闘う非合法党を捕えられて獄中にいるその党の党員の保釈との関係という問題に対してもこの程度にしか信用されてゐないとはいひやうの皮である。これは塙見一派の党員の保釈は現在のブルジョア民主主義的権利と基礎づく保釈は間違にならなくなるである。このような党の党員で捕えられて獄中にいる者は、保釈が不可能になり、長期投獄されることを覚悟すべきである。われわれは武装して闘う非合法のマルクス・レーニン主義党を建設し、プロレタリア階級独裁の樹立と社会主義革命を闘う決意である。われわれの闘いの前進の反映と

して、獄中同志の保釈が不可能にならうともそれはかまわない。

われわれの同志は、それに耐え切るし、獄中での闘いを組織し必ず

戦線に戻つてくるであろう。

よど号日・J公判は重要な局面を迎えている。

統一「被告」團の公判闘争は、現在、江崎融操従士に対する検察尋問が終了し、反対尋問が始まる。詳細は公判報告を参照されたいが、よど号を最初に爆撃したのが米軍機で、次に、自衛隊機、そして「韓国」機(バントンタツ)され、南朝鮮の米軍基地(三十八度線警備センター)の誘導により金浦空港に着陸させ、「韓国」陸軍がよど号を包囲するという、日米「韓」侵略反革命軍事体制が暴露されている。統一「被告」團は、日米「韓」侵略反革命軍事体制を徹底的に暴録するとともに、言を左右にして責任回避を図る副操従士日航資本を爆弾していく方針である。

尚、塙見一派はいつもの手口でデマをとばし、統一「被告」團が石田機長・日航に陳謝しているといつていて。見えすいたデマである。石田機長はまだ証人として出廷していないのにどうやつて陳謝するのか。塙見は、乗客、乗務員に対して謝罪と感謝の意を表明することが「投降路線」だといつている。よど号日・J闘争を赤軍派の闘いではないという。塙見にはそう見えるのである。統一「被告」團が朝鮮に行つた同志たちの意志の代弁も兼ねて(乗客に託された「ソウルからアピール」で表明されている)、日・J公判の最初からの大限の注意が払われている。統一「被告」團は、無媒介に謝罪と感謝の意を表明しているのではない。検察側証人として出廷してきた証人の証言を注意深く分析した上でのことである。乗務員といえ

よど号日・J闘争万才！  
よど号日・J公判勝利！  
地裁一検察の逆転策動粉碎！  
共謀共同正犯攻撃粉碎！  
日米「韓」侵略反革命軍事体制粉碎！  
日朝人民の國際主義的團結万才！

そもそもその立場も証言内容も異なっている。観に最後まで検察側の立場から証言したスチュワーデスの一人に対しても徹底的に反論し純粋が行なわれている。塙見は、公判闘争をマジメにやろうとせず、証人の発言を聞いていないから、今頃になつて「投降路線」などとデマをいえるのである。副操従士もそうだが、時代、石田は管理職機長であり、よど号を福岡空港、金浦空港にてリックで着陸させた張本人であり、その罪業を徹底的に暴露され繕われるであろう。統一「被告」團が日航資本(これは日帝の手先であり國際反革命である)に謝罪しているなどというデマは誰にも信用されないし、統一「被告」團の公判闘争の中で粉碎されているのである。